

平成元年5月1日

砺波医師会誌

杏和だより

第100号

第100回発行記念号

目 次

巻頭言：砺波医師会誌100号発刊を迎えて	柴田道也	・ 2
「杏和だより」100号に寄せて	杉下尚義	・ 3
所 感	住田宏	・ 4
時評：富山県地域医療計画と砺波医師会	柴田道也	・ 5
地域医療計画と病院の立ち場	小林長	・ 8
国立療養所北陸病院の歴史並びに現況	竹島俊雄	・ 9
病院のうっりがわり	能海勲	・ 11
地元医師会と城端厚生病院のかかわり	寺中正昭	・ 12
先生の椅子	吉田フリント 吉田外与志	・ 14
「杏和だより」の歩み	大沢真夫	・ 16
砺波医師会誌「杏和だより」の歴史		・ 18
100号記念散居村		・ 19
告知板：砺波医師会定例総会議事録（平成元年3月26日）		・ 69
定例理事会		・ 70
学院だより		・ 73
地区だより、病院だより		・ 75
編集後記		・ 78

発行所 砺波市新富町砺波総合病院内

砺波医師会

発行人 砺波医師会 柴田道也

＜ 巻頭言 ＞



砺波医師会誌 100号 発刊を迎えて

砺波医師会長 柴田 道也

砺波医師会誌「杏和だより」が昭和45年9月、第1号が創刊されてから19年、ここに記念すべき100号の発刊を迎えますことは誠に喜ばしいことでございます。

これも偏に編集の労をとって頂いた諸先生、並びに多数の玉稿を賜った会員の皆様のご努力の成果であると深く感謝申し上げる次第でございます。

「杏和だより」発刊の経緯については今回大沢先生が詳しく述べておられます。以来会誌は会の情報提供、政策方針、学術、会員の動向及び意見発表、情報交換の場としての役目を十分に果たして来ました。今改めて第1号以来の冊子を紐といてみますと、その折々の会の状況が懐かしく思い起こされて誠に感慨深いものがあります。

100号を一つの節目として会誌が益々充実し、砺波医師会が発展することを祈念する次第でございます。





「杏和だより」100号に寄せて

元砺波医師会長 杉 下 尚 義

最近の「杏和だより」を読んで、発刊当時を思い浮べ、内容、外観共に立派になったのを見て感慨無量です。

30年程前当時の砺波の若い先生方は、2ヶ月に1回程の割で良く飲み歩きました。誰れ言ふとなしに、この会に名前を付けたらと云ふわけで、今堀先生が「杏和会」といふ名を付けられました。初めは変な名前だなと思っていたが、「昭和」や「平成」と云ふ年号と同じ様に、慣れるに従って、別になんとも思はなくなりました。皆様方も御存知の様に、昔中国では「杏」は薬や医業を意味し、「和」は和会を指します。それで「杏和会」は医師の親睦の会と云ふわけになります。

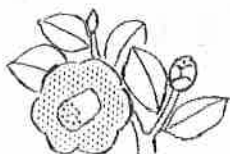
当時、日本医師会では、治療に当って検査をする様にとの指導がありました。が、個人個人ではなかなか大変だったので、岡島・伏木・平川の諸先生方の御世話で、砺波の先生方を主とし、志を同じくする人が集り、杏和会臨床検査センターが出来上がりました。検査は当時の砺波厚生病院の検査部をお願いしました。主任の前瀬氏は大変協力的で現在も続いています。

私が医師会の御世話をしていました当時、砺波医師会の機関紙として理事会の承認を受け現在に到っています。当時富山県の医師会で機関紙を発行しているのは富山医師会のみでした。河合・大沢の両先生には当時大変御世話になりました。

謄写版か活版かで理事会で話し合われましたが、謄写版が軟かく人間味があると云ふ点と、春日町の吉田プリントさんの献身的なお仕事が皆様方に気に入られて現在に到っています。

現在の「杏和だより」の内容その他については言ふことなし、立派な冊子になりました。

現在の編集の先生方は勿論、これまでの先生方に対して大いなる謝意を表します。



所 感

前砺波医師会長 住 田 宏

杏和だよりが第100号を発刊されるという、まことにお目出度いことである。

最近の急速に進展する老令化社会を迎え、経済大国といわれながらも、医療環境は年毎にぎわめてきびしくなるようである。

戦前は病人の大多数は自宅で死を迎えたが、最近では病院死が多くなっているといわれる。これは生活環境、特に住居、家庭の様相の変化の一因であろうと思われるが、最近の患者の病院指向と医学の進歩によるところが大きいと思う。大病院ならば最良の医療が受けられると思う人が多いためであろう。医療が医師の良心と善意のみで支えられた時代は過ぎ、社会と直結していかなければならない時代になってきているといわねばならない。大病院ならば最良の医療が受けられると思う人が多いためであろうが、果してそうであろうか。最新の医療器械の駆使、或は医術はあっても必ずしも最良の医療とはならないと思う。それはその器械を使い、医術を施す医師の如何にあると思われる。また、医療情報の必要性は論をまたないが、日々の診療において情報過多の現状に溺れないように注意し、患者にとって“最良の医療とは何か”を改めて問い直される昨今である。大いに反省すべきである。

最後に医療の社会性を問われる地域医療計画の一環として砺波医師会でも進めている病診連携システム計画の達成に大いに期待するものである。





富山県地域医療計画と砺波医師会

砺波医師会長 柴 田 道 也

約二年にわたる審議のすえ、医療法の規定に基づく富山県地域医療計画（概要）が平成元年3月31日付をもって告示された。全国で最後の告示である。これは行政施策の目標であり、県医師会も活動の指針とすることは既に了解しているところである。この度の告示内容はその概要のみであるが、その詳細は追って公表されるものと思われる。

この地域医療計画のなかで特に砺波医師会の医師会活動と関係の深いいくつかの項目について考えてみたい。

必要病床数

砺波医師会は西砺波郡市医師会とともに県下4医療圏のうち砺波医療圏として設定される。先ず必要的記載事項としての一般病床数は1799床であるとし687床不足であるという。算定の根拠は医療計画作成指針の算定方法に定められてはいるが、そのうちの砺波医療圏の流出入院患者数408と現在病床数の補正分78の算定根拠については、他県への流出患者数の把握、国保のみでの調査の点で疑問が残る。不足病床687が真に妥当な数字であるのか疑い点があり、今後も調査が必要であろう。

そもそも二次医療圏とは地域の一般の医療需要に対応して同じレベルの包括的な医療を提供していくための場であるとされている。砺波医療圏においてはどのような病院や病床が本当に必要であるのかを十分に検討すべきであり、単に病床が不足しているのを充足すればよいというものではない筈である。今後687という数字だけが独り歩きしないよう、行政や住民の十分な理解と協力を得る必要がある。

任意的記載事項

任意的記載事項の最初に掲げられているのは地域医療・保健体制の整備である。

プライマリ・ケア： 地域医療・保健体制の整備として、まず初期医療と定義づけられたプライマリ・ケアの充実があげられている。この計画では微妙な表現ではあるが開業医がプライマリ・ケアを受け持ち他の高度な医療機関（病

院)との連携と機能分担を計るようにとの記載がなされている。然し病院の機能にも外来、プライマリ・ケアを併せもつものとしたとする矛盾した記載がある如く、病診両者の完全な機能分担は不可能である。この問題は今迄も多くの人によって論議されており、単純に割切れる問題ではない。

ちなみに医療法や医療計画作成指針には「連携」とあって「連携」という文字は何処にも見当たらない、「連携」と「連携」とではやや意味が異なるが、この記載の相違には何か意図があるのであろうか。

医療の高度化、勤務医の増加、患者の大病院指向の現状のなかで、医療資源の有効利用のために「診療連携システム」の制定は是非必要である。砺波医師会でも委員会を近々発足させ、病診連携システム実施の予定でいる。将来は公的病院のオープン化などについても検討すべきであろう。

②次医療の充実：医療計画に指摘するごとく公的病院における医療スタッフ、施設設備の整備が必要であろう。自治体が採算を度外視した設備投資への配慮が必要である。然し現状では民間病院や有床無床診療所もまた②次的医療機能を受け持っていることへの配慮も考えねばならない。

保健・医療・福祉の有機的な連携：

従来の医師会、特に開業医は行政と共に地域住民の健康診査、学校保健産業保健、健康教育、その他予防活動を通じて地域保健活動に努力してきたところである。人口の高齢化に伴ない福祉は保健、医療と分離して考えることはできなくなってきており総合的な対策が求められる、砺波医療圏では他圏に比し在宅療養がゆきとどいているためか、老人保健施設は全く無く、特別養護老人ホーム等の福祉施設も不足しているようである。今後これら施設の充足が必要となる可能性がある。今のところ医師会としてこれら施設の計画はないが、今後医療の面での協力が必要であろう。

救急医療体制

特定医療分野の整備として先ず挙げられているのが救急医療体制である。

従来、西砺波郡市医師会は砺波救急医療圏とは別個に高岡救急医療圏に含まれておりこの体制に特に支障はなかったわけであり、この度の砺波医療圏として特に新たな救急医療体制をつくることは却って混乱をきたすのではなからうか。消防署関係及び高岡地区の二次病院が西砺波の患者の搬送と受け入れを拒む事態になれば、改めて砺波医療圏としての体制を検討する必要がある。

もともと砺波地区ではかかりつけ医による①次救急が定着し、二次病院との

病診連携も円滑に行なわれており、従って平日夜間の体制については今のところ必要がないように思われる。

その他、特定医療分野の整備として次の５項目が挙げられている。項目のみを記載しておく。

へき地医療の推進、結核・感染症対策、がん・その他の成人病対策、精神医療の充実、痴呆性老人対策、老人医療体制の整備、周産期医療体制の整備、リハビリテーション体制の整備、歯科医療体制の整備、難病対策の推進、腎不全対策の推進、ターミナルケアの推進、東洋医学の研究・推進、医薬品及び血液の確保、医療情報システムの整備。

次に医療・保健従事者等の養成・確保と資質向上を取りあげている。先ず医師数であるが砺波圏では県内で人口比でも最低であると指摘する（６１年度統計、医師数１７８人、人口１０万対１１１.６人）。「診療所医師の確保、地域的バランスのとれた医師の整備」をうたってはいるが、元来自由開業医制度の我が国において、そもそも誰に何って確保充実せよというのであろうか、開業の官僚統制、法的規制に繋がる恐れがないとはいえない。然し、砺波医師会の会員数をみても現在約１２０人、未加入勤務医を加えると勤務医数が開業医数を上回る。患者の大病院指向、医師の都市指向が改まらない限りこの傾向は続くであろう。

われわれ医師にとって欠くことのできない看護職員数については全国上位にあるとするが、その養成確保を図っていく必要を認めている、前砺波医師会で運営する准看護学院は借りている建物の取り壊しを迫られ、その再建に頭を痛めているところである。砺波准看護学院が開業医のためのみの施設ではなく、地域のパラメディカル養成の目的もあり、ぜひとも行政の財政的援助を切に希望する次第である。

本計画の推進体制の整備として現行の地域医療推進対策協議会をそのまま存続させ、新たに二次医療圏ごとに地域医療対策協議会を設置することになっている。その詳細については、これからの作業であるが、この協議会が計画の実施状況の把握、評価等の管理、具体的な推進方策の検討をし、県協議会に意見を反映するため是非砺波圏医師会代表が県協議会に参加する必要がある。又これら協議会の機能と権限の検討が今後是非必要である。

われわれは医師会活動を通じて任意的記載事項の達成に努力するという目的で砺波医療圏の設定に賛成したわけであるが、この医療圏の設定方法が妥当で

あったかどうかはこれからの推移をみて検討し見直す必要がある。会員諸賢のご意見ご批判を頂ければ幸である。



地域医療計画と病院の立ち場

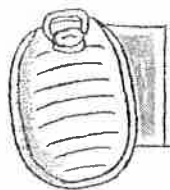
砺波総合病院長 小林 長

四月一日全国で最もおくれて富山県地域医療計画が実施段階に入った。その中で私達に最も身近に関心をひくのは「地域医療・保健体制の整備」の部分である。要約すると、「砺波医療圏は病床数・医師数ともに不足しており医療機能の整備が必要である」として「この地域の公的病院はより高度で専門的な医療機能の整備充実が必要である」と述べている。また一般的に「地域中核病院では専門性の高い救急医療に対応する体制の整備」を挙げ更に「比較的規模の大きい地域中核病院では高度特殊医療についても一部担当支援する」という方向を示している。以上を私なりに咀嚼してみると、私達は「地域に於て日常遭遇するありふれた疾患については診断から治療そしてリハビリまで一貫して完結する能力のある病院に整備する」というように総括できるかと思う。例えば悪性腫瘍について云えば特殊な化学療法から放射線治療まで可能なように整備することになるであろうし、今後益々増えるであろう虚血性心疾患ではPTCRから外科的治療まで可能とすべきであろう。これは「計画」の中の高度救急ということにも該当するがこれに関してはHCU、ICU、CCU、NICU、更に熱傷治療等も目標として把えておかねばなるまい。特殊専門医療の一部担当のことも頻度の多い疾患については能力に応じたものから順次適応を拡大してゆきたい。

初、医療・保健体制の整備のもう一本の柱はソフトの面で医療機関の連携のことである。私は病診連携の原点は医療資源も患者情報も患者さんのものであるという認識にあると思う。だから病院にあっては医師が紹介医へ詳細な報告を書くことから始まると思っているが、これが徹底されず先生方やひいては患者さんに大きなご迷惑をおかけしているのではないかと危惧しているが、高令化社会が進み疾病構造が変り、医療福祉の環境が多様化した現在、病診連携の信頼のネット・ワークの中へ患者さんが暖く包み込まれるようなシステムの導

入定着が一日も早からんことを期待している。これに関連して今後医療は在宅医療、在宅看護の方へ大きくシフトすることが予想されるので、これを支援する訪問看護や保健婦、PT、OT等による訪問指導は益々ニーズが高まるであろう。病院として持てる機能を精一杯利用して載けるように体制づくりを急がねばならない。

ここ数年来、高令化社会を迎えるに当って「医療資源は有限である。だからその有効利用が緊急課題である」という論調が高まり、そしてそこから更に「医療問題が医療経済問題によってその当事者能力を失うような事態は避けねばならない」という認識となり、その一つの集大成が「地域医療計画」になったと思う。云うなれば策定のベクトルは経済問題からであった。しかし実際にこの計画を担当し地域医療を推し歩める私達は正に180°体の向きを変えて、純粹に住民の幸せ（一人一人に最も適した形で最高のケア、ケアが受けられること）を追及するというスタンスで一貫されるべきであろう。



国立療養所北陸病院の 歴史並びに現況

国立療養所北陸病院院長 竹島俊雄

当院は昭和20年、陸軍の傷痍軍人結核療養所として発足し、終戦と共に同年の暮に厚生省に移管され、一般人の結核療養所として一時は600人の患者が入院していた。その後結核患者の激減と木造建物の老朽化により、新しい医療を行なうべく、昭和40年代初期には精神療養所への転換が決定され、昭和43年12月に二階建て100床の精神病棟が建てられたが、当時の県並びに医師会との約束事項は、「犯罪傾向の強い精神病質等の精神障害者、アルコール、麻薬、覚醒剤等の中毒患者、身体精神合併症患者、重度精薄者、重度心身障害者等の治療を行う北陸地区の精神科のセンター的病院になれ」という厳しいものであった。

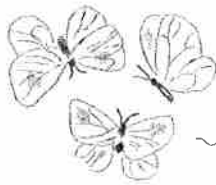
その後昭和49年に50床の精神病棟、昭和50年に動く重心病棟40床、小児異常行動病棟40床、昭和54年に外来管理治療棟、昭和55年に神経難病病棟40床が完成し、計270床、6箇病棟となった。これにより本造病棟

は無くなり、入院では結核患者もいなくなり、一応患者の入れ替えは完了した。この間は、まさに建て替えと患者並びに馴れぬ職員の移転、配置換えの連続の混乱期であり、豪雪に悩まされたり、昭和48年のオイルショックにより厚生省が、収支の悪い精神病棟の新・増築中止方針を決めたため、当院も当初の基本計画の大幅な方向転換を余儀なくされる等々苦難の時期であった。

その後逐次、神経疾患に対する機能訓練棟、精神科に対する作業療法棟の新築、准看護学校の建て替え、デイ・ケア棟の新築等と近代化が計られた。他方、隣接地にとなみ養護学校、特別養護老人ホーム「やすらぎ荘」が開設された。

約3年前、「国家公務員定員法」の厳しさによる人手不足や、医療内容の高度化に対応するため、厚生省は「国立医療機関再編成計画」を打ち出した。富山県には幸い国立療養所富山病院と当病院しか厚生省所属の病院が無いことから、統廃合、地方移譲の名指しを免がれ、当院も精神の地方基幹施設に決定した。また県の地域医療計画では、単科の県立精神病院が無いこともあり、県立中央病院精神科と共に全県の精神の中核病院として位置づけられた。昭和63年度には臨床研究等、施設の色を出すことのできる特殊診療棟及び他病院より遅れていた全病棟の冷房設備の完成を見た。また昨年度は精神保健法の施行による精神患者の入権尊重と社会復帰等、法改正による院内改革も行われた。今年3月末には高齢化社会に対応するため精神病棟の再編成を行い、老人精神病棟をそれまでより20床増床して50床とした。

厚生省は全国の国立療養所が国立にふさわしい機能賦与を現有人員で行うよう強かに指導しており、当院は人・物・金の無いなかで、(1)精神科男子閉鎖病棟(三次医療中心)50床、(2)思春期を含む女子閉鎖病棟(三次医療中心)40床、(3)精神科準閉鎖病棟30床、(4)精神結核合併症病棟20床、(5)老人精神病棟50床、(6)神経難病病棟40床、(7)動く重心病棟40床の計270床の体制となった。これは(3)を除いては、いずれも富山県全域あるいは北陸3県を中心とすべき病床となっている。外来については精神科、特に老人精神科、小児精神科、神経科、内科及び近隣開業医の先生方にご協力頂いている。耳鼻科、外科、歯科の診療を、また特殊外来としての精神科デイ・ケアを行っている。特に今後増加するであろう老人精神障害については、医師会の諸先生方や、市町村並びに保健所等との連携が必要と思われる。当院のように不採算な慢性の疾患を扱う場合は、家庭や福祉施設等とも適切な連携を保つことが大切であり、それによって外来や病床の有効な活用が可能となると考えている。



病院のうつりかわり

井波厚生病院長 能 海 勲

昭和41年当時井波厚生病院は常勤の小児科医と外科のパートの2人で運営されていた。養護老人ホームの併設のため内科医の常勤が必要であった。大学の要請をうけて昭和41年5月に赴任した。工場寮を改築してできた古い木造の病院であった。凡そ近代病院とは似つかない病院で、施設面でも医療機器でも貧弱で勿論スタッフもいない状態であった。当時は漸く新しい検査技術や診断技術が開発されつつある時代でもあった。二重造影法、内視鏡技術等それである。

当時井波町には叶山、育藤、得能、奥村、小西、新谷、大島の諸先生が、庄川町では藤井、南部、高田の諸先生の錚々たる方々が開業されていて住民は医療に恵まれている地域だと思っていた。その後洲崎、鷹西、野村、平川の各先生が開業されている。今思うと何のためにこの病院に赴任してきたのが不思議に思っている。短期間で辞去する予定が長くなってしまったと思っている。

当時、井波・庄川地区には三師会（医・歯・薬剤師）があり、一年に一度正月に懇親会があって若輩が末席をけがした。（これは今日もつづいている）いろいろと御教示をうけたりお叱りをうけた。（何のためにきたのかという意味をこめて）。たしかに地域医療事情からして病院をどうしたらいいのが困っていた。幸いにもこの地方には病院として当時砺波厚生病院（院長永木正雄先生）、福野厚生病院（森田太郎先生）、城端厚生病院（中出隆治先生）と井波厚生病院、国立療養所北陸荘があった。

いつの頃からか院長の会合がもたれた。先輩の諸先生から色々と御指導、御教示をいただいた。福野の北川先生、城端の中出先生は旧高校が四高で、砺波の永木先生と私が松江高であったことで旧高校のインターハイでボート部、剣道部と四校、松江高の試合等に華を咲かせていた時代もあった。先輩は有難いものと感謝をしている。

古い病院の移転新築問題が議論された頃、自治省の役人が病院診断にきたことや、その後砺波、福野、城端、井波の院長、事務長、医師会長、自治省等で懇談したことがあった。今思うと広域行政圏内の医療問題ではなかったかと思

ったことがある。

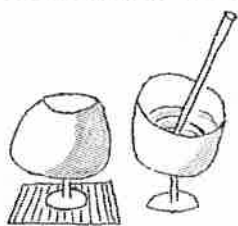
ともあれ昭和45年11月病院は移転新築ができた。以来医療機器、リハビリ部門、検査部門、レントゲン部門の整備充実につとめた。教室からの医師派遣も軌道に乗り、医療技術の向上に努力してきた。内科では主として呼吸器系、循環器系、脳血管障害の分野に、外科では消化器系を充実、内分泌の糖尿病について専門化をすすめてきた。リハビリも早期に導入し職員を研修に派遣した。

医療機器、スタッフの充実に伴い、地域の開業医の先生方にも病院の実情を御理解いただいた。多分昭和47年頃から地区医師会で研修会をもつようになった。年4~5回実施してきた。こうして病院と開業医の先生方と相互理解が進んだ。CTとか断層とか各種の診断技術に利用してもらっている。

病院機能も治療のみならず、検診、ドック或いは慢性疾患のフォローのために機器を使用していかなければならない。高度医療、更に病気のアフター、障害のリハビリ等々福祉医療へのアプローチとかかわりが広くなりつつある。

地域の医療事情も開業医の先生も、物故されたり、高令による廃業、或いは縮小と赴任時とは変ってきた。医療とかかわる分野が増えてきているにもかかわらず、地域の医療担当者が減ってきている。この分病院で担当しなければならず業務が増えてきているのが現状である。

病・診間の問題、共同利用の問題等病院がかかえている課題が山積している。時代の流れと共に病院のあり方も多様化してきつつあり、頭の痛い日々である。



地元医師会と 城端厚生病院のかかわり

城端厚生病院長 寺中正昭

今日の城端厚生病院にとって、公的病院としての地域における役割を考える時、今はなき二人の偉大な先生と現地元医師会の先生方の御理解と御協力を越えることはできません。

故・山秋義雄先生は、かつて当院が僻地中核病院の指定を受けようとしていた際に、地元医師会の代表として、私に「地域住民にとって、保健・医療体制が充実するのであれば、そんな良いことはない。医師会としても積極的に支援

しますから頑張ってください。」とおっしゃいました。約10年前のことです。右も左もわからぬままに、病院の進むべき方向を模索していた私共、若いスタッフにとって、山秋先生のそのひとは、どれほど私達を勇気づけてくれたことであったでしょうか。

それ以来、地元城端町をはじめ、五箇山地区の住民検診、夜間婦人癌検診、学童心電図検診などの検診事業やその結果をふまえての健康教育、保健指導などに病院のスタッフが一丸となってとり組む体制を整備することができ、夜間婦人癌検診などは、すでに今年で10年目を迎えんとしております。これら検診事業に積極的に参加する一方、近隣の町村における保健事業に対しても、病院あげて、それらを支援することができるようになったのも、地元医師会の深い御理解があればこそ、深く感謝いたしております。

またある日、山秋先生は、「患者の日常の生活の中に、みずからすすんで足を踏み入れて、患者の家庭環境、家族事情を自分の肌で感ずることが、地域医療のスタッフにとっては、欠かせない大切な仕事である。」とのお考えを、私達に説かれました。今日でいう、在宅医療システムの基本理念に通じるお考えを、山秋先生はすでに私達にお教えいただいていたといえます。このことが、現在、私達がどんどん地域に足を踏み入れていこうとする病院の姿勢の基本となり、エネルギーの源になっているといっても過言ではありません。

その山秋先生が、おなくなりになられた後、地元医師会のリーダーとして、病院に対し、いろいろ御助言、御忠告をいただいた洲崎元丸先生も忘れることのできない大先輩です。洲崎先生いわく、「ついちょっと前までは、私達の医院と厚生病院は、対等の立場であり、ある意味では競合関係にあったものだけど、今では新しい検査機器や診断技術が導入されたり、患者教育についても病院の専門医師とのコンセンサスが必要となってきたため、これからはどんどん相互理解を深めて、いろいろな情報を提供しあい、住民にとってよりよい医療サービスを提供できるように協力しあっていかなければならないね。」と。洲崎先生御自身、非常に御謙遜なされたおことばではありましたが、町の医療の担い手としての診療所と病院の今後のあり方を真に指向され、そのことが発端で、町の開業医の先生方と病院の間に、定期的な学習会を設ける契機ともなりました。現在では、月1回の症例カンファレンス、2ヶ月に1回のCRC、CPCを行なうまでに発展しております。さらには、伊藤先生、松田先生、山秋義人先生を中心に、城端地区の医師会メンバー（厚生病院の医師は全員・医師会会

員とさせていただいている)が、全員そろっての年3回の研修会を通じて、地域保健、医療に関する諸問題をとりあげて、相互理解と研鑽を積んでいるのが現状です。

たとえば、この四月におこなわれた春の研修会では、従来より懸案となっていた一般住民の便潜血スクリーニングが、今年もまた、町で予算化されなかったことをうけて、今年度は地元医師会がスポンサーとなって(松田先生御提案)検診対象者3,500名全員に、便潜血反応スクリーニングを実施していくことが全会一致で決議されました。また、試行段階ではありますが、在宅医療のあり方に関しても、個々の在宅患者に対する医師の訪問を、開業医師側からと病院医師側からと双方で、交互に定期的に行って、相互補完という型式で住民にとっても、医療側にとっても最も好都合に医療サービスを展開していこう(伊藤先生御提言)といった機運もみられ、城端地区にあっては、今や公私の区別なしに医師団が一丸となって、町の保健、福祉の行政施策にも少なからずインパクトを与えていこうという雰囲気がかがえます。

こういった城端町における診病間の連繫のかげには、偉大なお二人の先人医師の地域医療にかけられた情熱と進取の気象が今でも大きく息づいていることを感ぜずにはおれません。

今後は、お二人の大先輩の御指導にそうべく、現医師会の御理解と御協力を基本にこの地に診病連繫の理想的なあり方を求めて、微力ながらも努力して参りたいと考えております。会員諸先生方の御助言、御批判をいただけたらと思います。



先生の椅子

吉田プリント 吉田 外与志

となりの家具店の主人が「K先生へ椅子を納入して古いのをもらってきたがいらないか」と声をかけてくれた。見ると、四つ車のうち一つが修理されていて、回転がスムーズでないがラシャ張りで肘掛のある豪華なものです。早速カバーを洗濯してもらい、デーンと置いてみた。粗末な机には似合わないが、深く腰をおろすと、何か体がつつみこまれるようで、座り心地は抜群です。

私は青春時代の数年間、現代医学では考えられないような病に罹り、苦しい

長い闘病生活を送りました。どういうわけか、その頃からクレゾールの臭いが嫌いになり、K先生の椅子からその臭いが抜けるのにしばらく時間がかかったように思います。その後何度か端切れでカバーを縫ってもらい、今日も愛用しております。

この椅子の思い出と“杏和だより”の創刊とほぼ同じ頃だと記憶しており、もう十数年以上にもなります。

かつて、私のところで創刊号と名のつく機関誌や会報などは数多く注文を受けましたが、2号、3号とたちまちじり貧となり、そのうち編集者がひとりで作文してくるようになり、いつの間にか立ち消えてしまうのがほとんどでした。

このようなことを考えますと、十数年間を要しました“杏和だより第100号”が発刊されたことを心からお祝い申し上げますとともに、一度の欠刊もなく協力を惜しまれなかった先生方には敬意と尊敬を感ずずにはられません。これは並大抵のことではないと思います。

この節どこへ行ってもガリを切っている姿はありません。原始的で読みづらい謄写印刷はワープロ等の出現によってほうむり去られようとしております。昔、「日本の字のある限り謄写印刷はなくなる」と書物で読んだことがありましたが、時代の進歩は急速です。この読みづらいガリバン印刷を、近代医学の先端をゆがれる先生方が、十数年間100号という長い間ジット読んで下さったことを思えば感謝で一杯です。

ワープロという文明の機器で打たれた原稿を筆耕しながら、果してこんな印刷でよいのだろうか、毎回ジレンマにさいなまれながら、今回で終るだろう、これが最後であろうと思いながらも100号まで書かせていただきました。ありがたいことだと思うとともに回を重ねるごとに責任を感ずるようになりました。書きなぐりでよいからとか、いくらかかってもよいからとかで追いまくられた時代はもうとくに終わりました。

63年間という長い昭和とともに生きてきた時代が終り平成となりました。2月24日の大喪の礼は“哀しみの極み「さよなら昭和」万感胸過ぎる雨の列島”（読売新聞）そのものでした。

これからも杏和だよりの発展を祈りながら、K先生の椅子とともに仕事を続けていきたいと思っております。

記念すべき第100号に駄文を載せさせていただきましてありがとうございます。



「杏和だより」の歩み

初代編集委員長 大 沢 真 夫

杏和便り発刊100号を迎え、その辿った跡を書いて欲しいということであるが、私は古い発足当時のことを中心として書くことにする。

私が開業した当時（31年前）には砺波地区には定期的な会合というものにはなかったけれども砺波郡市医師会（当時の名称）の連絡事項が多くて、同業者の皆さんが会合する機会が多く、自然に懇親会へと移行し、これが当番幹事もち廻りで定期的な会合となり、その親睦会の名称を決めようということで、今堀先生の提唱で昔の中国の故事にならって「杏和会」と名付けられた。

昭和45年7月12日、福岡町の池畔亭で広野先生が当番幹事で杏和会が開かれた席で、既に発足していた杏和会臨床検査部の運営をよりスムーズにする為に会誌を発刊したらどうかという提案が岡嶋先生からあって私に編集の責任が課せられた。当時の記録（広野先生記）を此処に再録すると、—— 時はからずも吉田実先生御逝去の直後にあたり、まず各自故人の御冥福を祈って一分間の黙祷を捧げて後、宴にうつる。どなたも話題はいつしかありし日の故人への回想ばかりとなり、しめやかに盃を重ねていられたが、ゴルフ帰りの先生方（伏木、平川、矢島、岡嶋の諸先生）がやや遅れて到着されるや、一段とにぎやかになり、数々の思い出話に花が咲き、ついには話のみではあきたらず、卓に片足をかけ、胸を張るテナー吉田の独得のスタイルや「赤い靴」での逸話等、各先生がジェスチャーたっぷりに再現され、一同大いに笑う。夜が更けるにつれて前半の沈鬱なムードを吹き飛ばすかのように、杏和会には異例の放歌や珍舞踊が続出し、喧噪裏に幕を閉じる。その間、会誌発刊の話が出る等、有意義な一夜であった。——とある。

話は溯って、昭和45年4月、杏和会臨床検査部はめでたく設立されたと思う。私の知る限りでは、この頃既に富山・高岡・魚津の医師会等では検査センターが設立され立派に活動していた。砺波医師会でも検査センターを独力で設立しようにもそんな力がない。又今みたいに立派な民間センターが入り乱れるということも全くなかった時代で、例のゴルフの先生方及び吉田先生が中心となって、ここを何とかしなければならぬということで、砺波厚生病院（後の

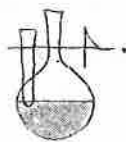
砺波総合病院)の検査室を自由に利用させて貰うことに着目した。その頃既に各自独自のルートで病院検査室に検査を依頼していたのを窓口を一本にして検査を依頼しようという構想である。

その時の病院長は氷水正雄先生で勿論この構想にご理解を示されたわけでありましたが、時の病院の事務長であった前山という方が特別の理解を示されて、公立病院の検査室を我々開業医に一つの窓口を通じ開放するという全国的に稀に見るところの破格の便宜を我々に与えて下された。私共の間では前山氏は非常に先見の明のある立派な方であるという専らの評判であった。

そこで早速私が第1号を編集することにして、多数の方々から原稿を頂き、昭和45年9月5日付けで無事第1号を発行し会員(砺波市在住のA会員)と準会員(砺波市以外で杏和会臨床検査部を利用された砺波医師会A会員)、その他に配布した。

当初は季刊とし先生方の随筆を中心に、いろいろなニュース、そして特に臨床検査部が発展するようということ種々の検査関係の情報を載せることに苦心した。第3号からは河合先生もレギュラーの編集委員になって頂きました。又その他の先生方にも随時編集委員になって頂き、杏和だより、又臨床検査部発展についての御理解を御願ひした。

昭和47年9月30日発行の第9号まで私が主編集委員でしたが、昭和47年12月25日発行10号記念特別号からは河合先生に主編集委員になって頂き、私が御手伝をするということにした。流石に河合先生は私の雑な編集とは異なって、きちんとした編集をされた。そして昭和51年6月25日発行の第33号より杉下尚義医師会長のもと杏和だよりは杏和会臨床検査部を離れて医師会の公報誌として以後隔月発行とし、全砺波医師会員に配布されることになった。又編集委員も広く全域から参加して貰うことになった。編集委員長は河合先生の後に福井先生、中田先生、森田先生へと引き継がれて今日発行100号を迎えることになりましたが、私は数年前まで長く編集のお手伝いをしていた関係上、杏和便りに特別な愛着があり、今でも昔と変わらず隅から隅まで読ませて貰っている。





砺波医師会誌「杏和だより」の歴史

第1号～第22号 砺波市在住医の懇親会を中心にして杏和会臨床検査部が発足し、そこへ東西砺波の有志が準会員として参加し、杏和会臨床検査部会報「杏和だより」として、昭和45年9月5日発行の第1号～昭和51年3月20日発行の22号まで発刊された。

編集委員（アイウエオ順、○印は編集委員長）

井村和男、○大沢真夫、金木梢一、河合康守、桐沢楚二、平川秋彦、
広野 隆、福井 悟、伏木唯和、矢島 治、山本幸介、吉田武雄、
吉田頼子

第23号（昭和51年6月）

砺波医師会々報となる。名称は今迄どおり「杏和だより」。

第23号～第45号（昭和51年4月～55年3月）

編集委員

大沢真夫、○河合康守、洲崎勇一、福井 悟、正木明夫、矢ヶ崎淳一
第48号（昭和55年9月）

名称が“砺波医師会誌 杏和だより”となる。

第46号～第57号（昭和55年4月～59年3月）

編集委員

大沢真夫、河合康守、洲崎勇一、津田達雄、中田喜夫、○福井 悟、
森田嘉樹

第58号～第81号（昭和59年4月～61年3月）

編集委員

大沢真夫、洲崎勇一、高橋卓朗、津田達雄、○中田喜夫、藤永洲一、
森田嘉樹

第82号～第93号（昭和61年4月～63年3月）

編集委員

荒川竜夫、大沢真夫、洲崎勇一、高橋卓朗、津田達雄、藤永洲一、
○森田嘉樹

洲崎勇一先生が死去され、昭和62年7月、第89号より

野村一郎先生に参加していただく。

第94号～（昭和63年4月～）

編集委員

荒川竜夫、津田達雄、仲村洋一、根井仁一、野村一郎、藤永洲一、

○森田嘉樹、八尾直志

第1号～第100号までの謄写版印刷はすべて吉田プリント（吉田外与志氏）方
でおこなわれた。

100号記念散居村目次

おめでとう	安達	正三	20
山を思うこのごろ	荒川	竜夫	21
大先輩	今堀	淳生	22
孫にうけた歌	井村	和男	23
マスゴミは中立か	石黒	雅臣	24
雑感	石崎	良夫	25
城端祭と神明宮	伊藤	茂克	26
乳児検診で思うこと	金井	英子	27
おにぎり	金井	正信	27
我が家のペット	金木	一精	29
福光地方のわらべ歌	金子	豊	30
おめでとう“杏和だより” 100号発行	河合	康守	31
雛	桐沢	奨二	32
レモンの木	佐伯	俊明	33
学校心臓検診とスポーツについて	才田	詮毅	34
狂っていないか	西勝	毅	35
さらなる発展を願って	青藤	外茂	36
週休??日	嶋大	二郎	36
浜波に来て15年	杉本	立甫	37
私の昭和史	千保	延江	38
元年の春	高田	外喜雄	39
交通事故	匠勝	則	40
リクルート事件に思う	谷村	芳太郎	41
特集号によせて	津田	達雄	41
「みどりの日」を思う	中川	昭忠	42
春の一日	中島	よし子	43

エルミタージュ美術館	中 田 喜 夫	44
「風の又三郎 — ガラスのマント — 」を見て	仲 村 洋 一	46
司馬江漢という人	永 森 文 夫	47
勉強会	南 部 芳	48
所属団体を考える	根 井 仁 一	49
左房粘液腫	野 原 正 雄	50
知らぬが仏	平 川 正 秋 彦	51
しじゅうから	伏 木 唯 和	51
少年期のスポーツ活動について	藤 井 正 成	52
スイセン	福 井 梧	53
肥満金魚	藤 永 洲 一	54
学会随想	正 木 明 夫	55
想い出の記	松 田 嘉 之	56
蓬萊山 仙人学入門番外	松 村 清 年	57
会館への夢	水 木 明	60
廈立つこと	宮 崎 修	61
春風に乘って患者さんがやって来る	村 本 潔	62
昭和のおもいで	森 田 嘉 樹	63
病院だより	八 尾 直 志	64
「杏和だより」100号発刊によせて	矢ヶ崎 淳 一	65
私の歳時記	矢 島 治	66
即医者のおたわごと	山 秋 義 人	67
自分の死	吉 田 武 雄	68
私と昭和	吉 田 頼 子	68

＜100号記念散居村＞



おめでとう

福野町 安 達 正 三

「杏和だより」創刊より20年100号の発行おめでとう。編集委員の先生方、本当にご苦勞様でした。度々原稿を依頼されながら、筆不精でつい失礼しております。老令になると「おめでとう」と云われるのはお正月位ですが、先日、写友より「おめでとう」と云われました。国画展入選内定のTelでした。写真を趣味として、国画展を初め、となみの美術展、町展、県展等に出品している今日此頃です。今後共、貴誌の発展と会員各位の健康をお祈り申し上げます。



山を思うこのごろ

砺波総合病院 荒川 龍夫

砺波に住まいしはじめて、はや10年が過ぎました。前にいました泊病院の頃は、年に2〜3回の山行（とりわけその頃は穂高に夢中になっておりました）は、欠かさずにいたのですが、なぜか砺波に来てから山に疎遠になっております。かと言って、山への思いがすっかり薄れた訳ではなく、書店で本を漁るとき、何回かに一度は山の書籍棚の前に立っておりまして、家の本箱にもなんとなく山の本が溜まってまいります。言い換えれば、体が言うことを効かなくなった分、目で山登りを楽しんでいるということになりましょうか。

同じ意味で、晴れた日に病院の屋上から眺められる立山連峰や、いわゆる砺波の東山の山並みは、十分過ぎるくらいにイメージ・クライミングを堪能させてくれます。秋の快晴の日に、いい年をして、恥ずかし気もなく望遠鏡を持ってウロウロし、

『ウフーッ！穂高が見える！』

『立山にゃ、もう3メートル雪が積もったワイ』

などと興奮するのですから、我ながら可愛いいもんだと思ってしまうす。

昨年の11月下旬に、ふと思い立って曾の医王山へ国見峠の方から登ってみました。それこそ10数年ぶりの訪れでした。大きな道がひらけていて、かつての印象とは随分違っておりましたが、国見からの展望の素晴らしさは、やはり三国一だわいと大いに満足しましたし、三蛇ヶ滝への、落ち葉と雪の細い山道の登り下りの感触は、胸がキューッと痛くなるような山恋のそれでありました。

続いて、12月はじめ、立山山麓にある尖山（とがりやま）に、初めて登りました。500メートル足らずの低い山ですから、興味のないかたには、全く酔狂でしかないでしょうが、学生時代立山をホーム・グラウンドにしていた私にとっては、すぐ傍を横目でみながら通り過ぎるだけで、気になりながら登れなかった山ですので、この訪れには初対面の胸の高鳴りがありました。

雪の上に熊の足跡を見付けたりしながらの、一時間ばかりのあっけないくら

いの短い登りでした。しかし、狭い雪の頂上に立って、大辻山、大日岳、立山への長い尾根の連なりを眺めたとき、自分の体の片すみにひっそりとうずくまっていたような山恋しの思いが、スックと立ち上がってくるのを感しました。

『ソウダ！ 忘れていた！ ふるさとの山に登ろう！ すぐ目の前にあるふるさとの山に登ろう！』

学生時代のあのとき、雪焼けでジャガイモの皮を剥いたような顔をしながら、大門、猿ヶ山、袴腰の春の尾根をたどったんだっけ。

牛岳にものぼらなくちゃ。

あの高清水や高落場の尾根筋はどうなったんだろうか？

いま4月、いつにない早い雪解けに、わたしのふるさとの山々は、もう6月のたたずまいです。とても快適な残雪の尾根歩きが楽しめそうには見えません。麓の道には大の苦手の蛇のお出ましも、そろそろ始まったのではないのでしょうか？

ひそかに望遠鏡で尾根の雪の残り具合を調べながら、焦っております。



大先輩

今堀淳生

昭和21年復員後医師会に入会しました。当時の医師会は地区の警察署の衛生医療関係に属する様で、医師会の正賓は警察署長でした。入会時最初の医師会出席は左川橋詰（現在塚亭）でした。参加の大先輩の顔触れは、桃井文伯先生、杉下尚一先生、西尾貫一先生、大井敏夫先生等錚々たる面々でした。先生方は地方の名士であり学識者であると共に豪放磊落自由奔放の持主でした。会合の席での一狹茶を紹介しますと、M先生兄弟と大阪へ遊びに行き、当時は極く珍しい自動車に眼が眩み、有り金全部叩いて買いガタガタ路を石動近く近引張って来たが遂にエンジンアウト商人に売却した所大阪へ出発時の倍格となった。N先輩は診察中電話あり、魚津に鯛が揺ったと聞くやイタリー製の長靴の履くダンテイ姿でハーレー（外車）に打ち乗って魚津方面へ約一週間の逐電と相なった。S先輩常々狐に化かされる話が街頭にあった所深夜の往診の帰途自転車に乗り一生懸命ペダルを漕げども漕げども帰宅出来ず疲労困憊自転車を

下りて見れば何とスタンドを立てた筈だった。亦その頃しばしば停電あり、医師会の暮会でローソクの光で烏鷲を戦わしていると、突然ワアーランプを引繰り返したのM先輩の大声（逆転）に皆驚愕した。

当時若輩の私には大先輩方は明治生れの気概と一國一城の主の如き生き様に感銘を受けると共に良き時代であったなと思っています。



孫にうけた歌

井村和男

「リン、リン、リン」 又々孫からの電話のベルである。「おじいちゃん、ネズミの歌、うたって！」 尤人の孫の七番目。三オ六ヶ月の充分に廻らぬ舌での注文である。

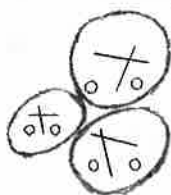
受話機をマイク代りに今夜も又大きな声で昔子供の爲に作った拙い歌を歌います。

真ちゃん（孫の名）は寝ていて知らないけれど
おじいちゃん本当に恐かった
大きいネズミと小さいネズミ
皆んなで廊下をかけくらべ
ガタ ガタ ゴットン チュ チュ チュ

真ちゃんはどうだか知らないけれど
おじいちゃん ネズミが大嫌い
お餅を食べたり 柱をかじり

シッポふりふり 運動会
ガタ ガタ ゴットン チュ チュ チュ

電話の向ふで孫も一生懸命に歌っています。近所迷惑とは思いますが、又々二、三日したら「リン リン」「ネズミの歌うたって」と可愛い電話がかかることでしょう。



マスコミは中立か 石黒雅臣

昭和63年3月9日の北日本新聞は、京都府のある公立高校の卒業式で校長が「日の丸を大切にしなければならない。日の丸に反対しているのは、たった一党だけで自国の国旗はもとより他国の国旗も大切にしなければならない。」と述べ、日の丸を批判した生徒会の答辞を生徒会誌に載せることを禁じたことを高校長の問題発言として大きく報道し、この高校長の発言を批判した。この記事から考えると北日本新聞社は日の丸を日本の国旗として認めず、この国旗を大切にしようとする精神は全くないことが疑われる。外国籍の生徒も日の丸を大切にと云う。この高校長の発言がどうして問題発言なのか私には到底理解出来ない。同校には10数人の中国、韓国、朝鮮籍の生徒がいるが「自国旗を大切にするように他国旗も大切にするように教えられている筈だ」と日の丸を大切にするように強調したと云うのがどこに問題があるのかK紙の編集局長に聞きたい。日の丸が国旗として制定されて以来、この旗のもとでいろいろな事件があったかも知れない。しかし国旗はあくまで国旗である、悪いイメージがあるからといって事件の度に国旗を変えている国があるであろうか。K紙は社旗を持っている筈である。その社旗を社員が大切にしなかったり、他人が踏みつけたり、破ったりしたらどんな気がするであろうか。愛社精神があれば平気でいられない筈である。

有吉佐和子さんはかなり進歩的な考え方をする作家として知られていたが、スエズ運河を通る時に見た日の丸のことを書いている。日没の時刻だったけど日本の商船が日の丸を掲げて運河を進んで来るのを見て涙が出るような感動を覚えたと云う話はまさに民族感情の表れと思われる。

日の丸を見て胸が悪くなる日教組や朝日新聞の連中は本心、国旗を赤で塗りつぶしたい気持で一杯なのだと思う。K紙の編集者も同じ気持なのかも知れない。日の丸を見て胸が悪くなる人は他の国の国旗に対してどう云う気持を持っているのであろうか。

いつか曾野綾子さんも述べていたが、何か儀式の際、国旗を掲げ国歌を歌うのは世界的な常識で、それをしないのは世界に殆んど例がない。しかし戦後の日本人はよその国へ行って国旗や国歌に対する礼儀を守るように教えられてい

ないから文部省が通達を出して国際教育をするのは当然だと云っている。

日の丸に反対する日教組や新聞社の連中は社会主義国家へ行っても、その国旗掲揚に反対し、絶対起立などはしないで貰いたい。

また、天皇陛下が入って来られた時に、絶対に起立しないのは日本の新聞記者だけだそうである。その国家を象徴する元首のような人に対しては起立をして迎えるのが国旗の話と通ずる国際的な常識であり礼儀だと思うがどうであろうか。日本の新聞記者は陛下に対しても日本国旗に対しても絶対起立をしないと云われている。ここにマスコミ特に新聞の傲慢さが露呈されている。

今度の消費税施行の際の便乗値上げを記事にする資格が新聞にあるだろうか。理容業やクリーニング店と同じように、新聞代をカルテルで値上げしてしま。たではないか。

税体系の改革の意味も報道せず、野党と一緒にって一方的に消費税に反対する態度は全く、偏向マスコミそのものである、最近ではマスコミの横暴ここに極まれりとの感を深くしている毎日である。

最近のある調査を掲げておく。

日の丸を国旗としてふさわしいと考えている人：86%。そうは思わない人：4%。答えない人：10%。

殆んどの日本人はあれで良いと考えている。



稚 感

井波厚生病院
石 崎 良 夫

100号記念の発刊、おめでとうございます。今後ますます会誌がご発展することを祈り申し上げます。

私の勤務している病院で昨年10月より磁気共鳴画像装置(MRI)が稼働を始め、その新しい画像に目を見張りまた解釈に困惑している毎日です。脑梗塞患者の責任病巣の確定ができないほどの病巣の多さに驚き、あるいは脊髄造影をしなくても椎間板ヘルニアの程度が解るではないがとうなずいてもいます。CTが出現し始めた頃に入局した当時が思い出されます。

最近の医学は画像にとられすぎだとか、今の若い医師は画像がなければ何も解からないなどの言葉も多く聞かれます。しかしそれこそ何年もかかって幾例もの症例にあわなければつかめなかった病態がそれほどの経験がなくても確

実に把握できる画像は、医師にとっても価値あるものと仕事をしています。また患者にとっても苦痛や危険のない検査が行なわれる方向に向かっていることは、このましいことと考えています。ただし、経済面を無視しがちな医療にはすべきではないと思います。

以上、最近の雑感を書かせていただきました。新入りですので、先生方のご指導をよろしくお願いいたします。



城端祭と神明宮

伊藤克巳

城端神明宮の祭は、御存知の通り、春は所謂「曳山祭」、秋は「むぎや祭」です。

春期大祭は、歴史的には種々の変遷があったようですが、現在行われている内容を説明してみますと、先づ神明宮としては、5月14日本宮に於て、修祓式の後、神明、八幡、春日の三神輿に加えて、最近は菅公を祀る子供神輿、以上四神輿に、御神体移乗の儀の後、囃払いの獅子舞を先頭に、神旗、神輿、そして、氏子総代の供奉と行列をもって御旅所に向います。

御旅所では、一般の参拝の他、出町六ヶ町の青年達により、夫々庵唄奉納が行われます。

一方、各町内に於ては、曳山を組み、庵屋台を設け、曳山宿の家に各々の御神像を飾りつけて、宵祭となります。

明けて15日には、獅子舞、鉦鉦、傘鉦、祈旗、神輿、そして各町の庵、曳山と並ぶ祭行列が、神輿御台付、庵唄所望を行いつつ終日繰り広げられる訳です。

以上、極く簡単に述べましたが、詳細は城端曳山史に記載されております。

30年ほど前に、当時敬神会長であった洲崎哲二先生の御委嘱で已む無く理事(氏子総代)にさせられたが、その後不適任であると考え、別のお方に替って戴いたのですが、昭和45年から、再度理事を拝命する被目となり、今日に及ぶ訳ですが、元来、不精者ですから名ばかりの理事であります。

敬神会としては、神社護持の責任を負っていますから、氏子9ヶ町内に応分の御負担をお願いして予算を組み、これを執行し、決算を正しく行う必要があります。祭礼費を含めて、神域整備や社殿維持などに多額の経費を要する事、地域の

過疎化から、氏子が減少しつつある事。天皇家と直接結びつく点が若い人達の批判の的らしい事等々、悩みの種は尽きない。

抑々、神社神道とは？「宗教」であるのかどうかの議論もあるらしいが、洲崎元丸先生から、その蘊蓄を聞かせてもらい、いろいろ教えていただいたが、結局、わからず仕舞で、その先生も急逝されてしまいました。
遮莫、鎮守の社として、天皇家との関連を出来るだけ「薄く」する方向で「吾々のお宮さん」像を強化しつつ護持に微力をと考えています。



乳児健診で思うこと

砺波総合病院小児科
金井英子

外来で乳児健診をしていると、いろいろな母親の育児を目にします。外来での仕草や、ちょっとした会話の断片から家庭での様子は大ざっぱに推測することができます。

20才前後で出産し、自身の母親に付き添われてくる若い母親。いかにもいとおしそうに我が子を抱き上げ、語りかける母親。上の子どもを叱ったり叩いたりしてイライラしている母親。寝不足で途方に暮れている母親。

育児の上手な母親もいれば、要領の悪そうな母親もありますが、でも、どの母親からも、子どもに対する^{深い}愛情を感じられ、どの赤ん坊も幸福そうな顔に見えます。そして「そんなことは気にせず、放っとけばよいんです。」とか「こんなふうにしてみたらどう。」等私の小さな助言で、母親の顔がパアッと明るくなり、嬉しそうに帰ってゆかれる時は、私も、良いことをした後のような爽やかな気持ちになります。

どうも赤ん坊を育てるということは、母親にとっては大変楽しい仕事であるようです。ですから、あまり楽しくなさそうな顔をしている母親がいたら、よく話をきいて相談にのるなり、励ましてあげるなりの援助が必要だと思います。楽しみながら子どもを育てることが大切のように思います。



おにぎり

砺波総合病院内科
金井正信

外来が終わって食事に行こうとしたら、おにぎりを食べながら玄関を見てい

るおばあちゃんをみつけた。家人の向えでも待っているのか、楽しそうに食べていた。

おにぎりにはいろいろ思い出がある。

小学校にあがる前ごろ、夕方家に帰ると、カマドに飯が炊かれていて、大きな黒いゲタのような形のフタがゴトゴトゆれていた。白い湯気がビュービューと出てくると、家中にいい嗅いがしてもうおなかがすいて仕方がない。おばあちゃんにせがむと、行儀が悪いとか何とか言いながら、それでも手を湿らして、塩だけ入れて、炊きたての釜の中でお焦げのおにぎりを作ってくれた。皿に入れてもらい弟と喧嘩しながらよく食べた。

小学校1,2年の暮だと思う。いつも一緒に遊んでいた“外ちゃん”^{そと}の家に朝早く遊びに行ったら、今日は山の田圃に行くとかで、ゴザを背負っていた。弁当ももっていくというので、僕も外ちゃんの家の人について行くことにした。目的の田圃まで1時間は歩いた。山の奥の谷に大きな溜池があって、その下に広い田圃が3~4枚ほどあった。池のすぐ横に小さな小屋があった。外ちゃんのお父さんとお兄さん達が耕している間、二人でしこたま遊んで、昼御飯を食べた。外ちゃんのお母さんが、緑の地に黄色の縞の入った風呂敷からおにぎりを出してくれた。何もついていない表面が少し焼いてあるだけのおにぎりを小屋にあった黒い金属製のヤカンで沸かしたお湯と沢庵で食べた。食後、働いた人達はその場でしばらく昼寝をしていた。その田圃も今は木が植えてあると人に聞いた。

中学の連合運動会の昼食時間に、友達と二人でビニールの風呂敷を広げて、おにぎりを広げたら、風でビニールがめくれて、おにぎりが砂の上に転がってしまった。腹が減っていたし、他に食べ物もないし、もったいないので、二人で拾って食べた。午時からずっと口の内がザラザラしているような気がした。

高校生になって、バレーの練習をするとおなかが空いて困ると泊りに来ていた父の伯母に話したら弁当の他に、昆布のついた直径10cmもあるような大きなおにぎりをえつつくってくれた。あまりに大きいので、一緒にバレーをしていた同級生に一つやって、二人で急いで食べてから練習をした。練習中、少し胸焼けがした。

大学に入ってから下宿生活なので、あまりおにぎりは食べなかった。初夏の頃かと思うが、誘い合って日曜日にハイキングに行く事になった。私は手ぶらで行ったが、相手は弁当を作ったと言って何か持ってきた。目的地まで歩い

ていって、少し坐って話などしてからお昼にした。卵ぐらいの小さなおにぎりが7~8個あった。海苔もついていた。食べたら、海苔の内は醤油味のチャーハンが入っていた。変わったおにぎりだなあと思った。そのあとも一緒に何回が出かけたが、おにぎりをもらったかどうかよく覚えていない。そのうちに、出かけなくても、飯を作るようになって現在に至っている。

考えてみると実にいろんな人にいろんなおにぎりを食べさせてもらった。そして、それぞれ違った味として記憶に残っているし、実に懐しく思い出させる。

お店のおにぎりの方がおいしいと主張している私の子供達にも、何とかして手造りの、まずくても暖かい思い出に残る味がある事を教えてやりたいと思う今日この頃です。



我が家のペット

金 木 精 一

我が家に、一匹の雄の柴犬がいる。名前は「リュウ」と云う。生後3ヶ月の仔犬の時、知人より譲り受け、現在は4才、人間でいえば約30才に相当するそうである。

小生5~6年前より毎朝30~40分程の散歩をするようになった。最初は1人で足のむくまに歩いてしたが、1人歩きも味けなくなり、犬でもつれて歩けば、楽しみも加わり、散歩も長つづきするのではないかと考えたのが犬を飼う気になった始まりである。

小生もともと不精なたちでもあるので、あまり病気もせず、手のかからない犬でなければ---と思い、犬に関する本を見たり、ペットショップを尋ね歩いたりした。コリーを小さくしたようなシェルティーは、おとなしいが、毛が長く手入れが大変ではなかろうか、秋田犬やシェパードは力も強く、恰好も良いが、力が強すぎて手におえないのではなかろうか---と考えあぐねた結果、柴犬は毛も短かく、体も中位だし、放っておいても病気にもかかり難く、食べ物も余り手をかけずに済むとのことで、柴犬を選んだ次第である。犬種が決まれば、少しは血統のよい、恰好も多少はましな犬がほしくなり、あちこちを探したところ、稲光の知人の所に、血統書付きの両親から生まれ、又血縁の中に、日本犬のコンクールに入選したのがおり、仔犬が数匹生まれたとのことで、その中の好男子を譲ってもらうことにした。つれて来て1週間位で我が家にも馴

れて来たので散歩につれ出すようになった。仔犬の時は小さかったせいか、上野の西郷さんの銅像のようだ、と近所の人達にひやかされたものだ。単に散歩のつれのつもりで飼いだめたものであるが、次第に積がうつり、可愛さも増し、リュウも我々に答えてくれ、完全に我が家の一員となってしまった。

日中は裏庭で放し飼いにしているので、暑い時は日陰で、寒い日は日なたを求めて長々と寝そべり、自由気ままにふるまっているが、一旦、見ず知らずの人が現われると吠えまくるが、犬好きの人や子供が来ると尻っぽを振って甘えて来る。朝、私が起き出すと、その気配をさと、キュンキュンと甘え声を出し、早く外につれ出して呉れと催促をする。散歩に出れば颯爽と私に先だって歩き、途中他の犬に吠えられても知らん顔。野良犬に飛びかかって来られても敢然と反撃に出て、決して逃げ出さない。どんな大きな犬でも向って行くので、私の方が恐ろしくなり、手綱を引張って逃げ出す始末。食餌も、残飯でいいと聞いていたが、我が家の一員ともなると、肉、魚、野菜を塩分抜きで、別に煮てもらっている。

病気についても、狂犬病の予防注射は云うに及ばず、肝炎、ダステンバーの予防注射、フェラリアの予防薬の服用も欠かさず、主治医の獣医さんも決っている有様である。

時折、外界が恋しくなるのか、脱走を試みることがある。そうなるとさあ大変、家内は仕事をほうり出して、町中を探しまわる始末、最近では、しばらくすると帰って来るとわかっていても、交通事故にでもあわないかと探さずにはおれない程の心配の仕様である。

「リュウ」は、大事な我が家の一員であり、「リュウ自身」も、自分が我が家の一員であることを確信している様である。



福光地方のわらべ唄

金子 豊

福光地方の「わらべ唄」につぎのものがあります。

のすろ田のおばいさ とろぼうて

くりっしゃい なんどろ ぼおんじゃ

あさどろ よどろ ひるまのすずめ

よさるのカラス ホワイー ホワイー ホワイー

のすろ田は苗代田、おばいさはお婆さん、とるは鳥、ぼうては追って、くりっしゃいはください、なんどるは何の鳥、ぼおんじやは追うのか、あさどるは朝の鳥、よどるは夜の鳥、よさるのは夜のとなります。

これは1月15日朝早く、子供達が嚙を踏んで、火をつけた藁を持って田を廻り、苗代田で悪さをする鳥を追う時の童唄です。鳥追うてこいと親にいいつけられ、子供達がはやして歩いたものです。それをしないと朝のお雑煮を食べさせてもらえなかったといひます。お雑煮は田子と小豆汁で今でいう“ぜんざい”です。田子は米の粉をねってまるめ、米飯や小判、杓、蒟などの形に作られます。

それから“木いじめ”の風習があり、鉋や鎌で柿の木に傷をつけ、

なるかならんかものゆうてくされ

ならんなら鎌でちよん切るぞ

別の人が、

ハイハイなります なります 枝の先が折れるまでなります
といって田子を木の傷口にぬりつけます。

昔は百姓達が、水不足、風、虫害などに悩まされて稲を作りました。悪神、悪霊の類がはびこり、これらを駆逐する行事が全国あちこちに伝えられています。特に米どころに多いのは当然でしょう。苗代田は農家にとって大切なもので、悪さをする鳥を冬の頃に追い払うたものと考えられます。成木責めの行事は日本のあちこちにあったようで、キゼメ、ナリモノイジメ、キリオドシ、ナレナレなどといわれます。一種の呪法です。

これらの行事は今はもう行われなくなりました。



おめでとう

“杏和だより” 100号発行 河合康守

“杏和だより” 100号発行。おめでとうございます。

「杏和」という言葉は、皆さんよくご存じのように、(杏林)の逸話から引用したものでありますが、昭和30年代の前半の頃に出来た「砺波市内の開業医の集い」の名称として名付けられた「杏和会」の頭二文字を借用して、昭和

45年にできた臨床検査を砺波厚生病院に委託するクループの連絡誌を“杏和だより”と名付けて発行して以来今回の発行で100号目になるのではないかと思います。

今ここで凡そ20年前の“杏和だより”創刊の頃を思い出す時、今更ながら月日の流れの速さをひしひしと身に感じております。仲間同士の連絡誌として発行した小冊子が、砺波医師会の会誌として医師会会員全体に読んで頂く物になった時には、その事の重大さから色々と苦勞もありました。年4回の発行が6回になったことも苦勞の種でありました。依頼した原稿が締め切りの日までなかなか集まらず途方に暮れたことも幾度かありました。しかしながらその度に暖かい会員の方々のご協力によりまして無事その困難を乗り越えることができました。毎号新しいものが発行され、それを手にした時の嬉しさは今でも忘れる事ができません。

“杏和だより”はこの後も末長く次々と発行されることでしょう。砺波医師会会員のもっとも大切な意思統一を図る会誌としての役割を十二分に発揮して頂く事を期待いたします。



雛

桐 沢 獎 二

先年、母の実家で土蔵の改築をすることになり、長い間、預けばなしになっていた古い箆箆や長持、その他もろもろが邪魔になるからと言って送り返されてきた。

以前より持っていくように言われていたが、家が手狭だとか何とか言って、そのままにして置いたので、向こうもシビレをきらしたのであろう、急に、なんの前触れもなしにトラックで送られてきた。腹が立ったが、こちらが悪いのだから仕方がない、とりあえず古い空き病室へおさめ、暇をみては少しずつ整理していた。

その古い漆塗箆箆の引出しの底から小さな箱がいくつも出てきて、中から胡桃で作った、お雛様が現れたのには驚いた。

胡桃の一つ一つに胡粉を塗り、その上に顔料で顔、衣裳、冠、笏、樂器その他いろいろの小道具など、細やかに描かれている。しかし、長い年月の間に落剥がひどく、また極彩色の台座から、離れてしまっているものも幾つがある。修

理しなければならないが、今様の接着剤など使用する気にはどうしてもなれず、普通に飯粒をすりつぶして糊をつくり、竹篋で一つ一つ、それぞれ創傷処置と言った気持で養生した。

手間暇をかけた甲斐あってか、何とか雛たちは息を吹き返したようで、長い間、日の目も見せずに眠らせていたのかと想うと、申し訳なさもあり、いとほしさも、また一入であった。

わが家も娘たちが居なくなっていて、二人きりとなり、ここ数年、三月の節句と言っても、せいぜい雛の軸をかけるくらいで済ましてきたが、平成元年となって初めての雛祭り、それこそ、いそいそと娘のように雛を飾る気になり、この胡桃雛を並べて小さな小さな雛段が出来上がった。

内裏、大臣、三人官女、五人雛、使丁、みなそれぞれに平成の御代を待っていたかのように すまし顔でござる。

この頃の豪華で、きらびやかな雛飾りよりも、ずっと趣があり、じっとながめていると、久しぶりに母に会ったような温かさを感じた。

この雛は、何時の頃か道具屋によると、あの筆筈は使っている釘や金具からして200年は経っているという)誰が作ったものであろうか、その昔、女の子たちが、どんな着物を着て、どんなご馳走が出て、どんな男の子たちがおよばれで、どんなことを話していたのだろうか、夢は果てしなく続きます。そして、こんな楽しい一ときを持たせてくれた胡桃雛に感謝の気持で一杯でありました。

たれかれの面影ほのか雛まつる	しょう二
こしかたを語るや雛のおちょぼ口	しょう二
箱一つ一つに雛の夢たのし	しょう二
箱一つ一つに雛 ^{ヒナ} 古びけり	しょう二

平成元年 雛の節句の日



レモンの木

佐伯俊朔

幹の径は約2.5m、高さ1.5m、素人の剪定なので、やたら枝葉が多く、何の変哲もない、我が家のレモンの鉢植えである。

アメリカ・カリフォルニアが原産地かと思っていたが、ヒマラヤ山麓とのこ

とである。

今から三年前、自動車セールスのN君が、約5mのレモンの苗木を届けて呉れた。

当時正直云って、園芸にはさ程、興味は持っていなく、むしろ稀代の草花おんちとでも云うべく、出まかせの^{花の}名前を云って、失笑を買っていた位であった。そんな私の事を知ってかどうか、花を愛する親切な患者さんが、四季折々の草花を診察室や待合室に飾って下さいと持って来て下さる。誠にうれしい事であるが、もて余し気味であった。今から思うと、何と不謹慎な事であったかと、深く反省している次第である。

N君から戴いたレモンの苗木を育て、実をならそうと決心したのは、かのサンギストのレモンが頭に浮かんだからに違いない。

朝夕の水やり、日光浴が日課となり、レモンの苗は私の期待に応えて、順調に大きく成長していった。レモンの木を毎日世話をするのが楽しみになって来たのである。

話しはそれるが、レモン栽培がエスカレートして、昨年は、家庭菜園、チューリップ栽培にと発展した。勿論プランター栽培であるが、茄子、トマトと大成功で、大いに自信をつけた次第である。

然しレモンの木は順風満帆に育ったのでなく、大きなピンチが三度あった。鉢が、フェーンの南風に倒され、根部が完全に露出してしまった事、遅霜にあって上部三分の二の葉が枯れてしまった事、そして毛虫の害である。レモンにとって誠に迷惑至極であったに違いないが、その度に奇跡的に回復して呉れた。

それだけに余計にいとしく感じられるのである。

遅しく育ったレモンの木は、私に園芸の楽しさと、やすらぎを与えて呉れた。育ててよかったと感謝している今日此頃である。

肝腎の果実の方は、何時なるのか、皆目分からない。モモ、くり三年、柿八年と云われるが、レモン何年なのか、御存知の方は教えて下さい。



学校心臓検診と スポーツについて

井波厚生病院小児科
才田 詮

昭和48年学校保健法が改定され、学校心臓検診が義務化されてから、小学校・中学校で心電図の検査が施行され、学校医の任務も重要となって来た。

また、省略4誘導心電図・心音図併用方式の検査も普及し、更に管理不要心疾患のも検討され、調律異常、QRS電気軸異常、洞性不整脈、右脚完全ブロック、無害性雑音などは、児童生徒に運動制限する必要はなく、また定期的に医療機関を受診する必要はないとされた。

しかし吾々学校医としては突然死の問題もあり悩むことも多い。指導表の記入も過激な運動は禁ずると書いても、マラソンは、水泳はと聞かれて困ってしまう。専門医の話では、マラソンはスタート直後とゴール直前に無理をしないように指導すれば良いとの事であるが、やはり心配である。新聞紙上で教師が罰としてマラソンをさせ急死したり、親や先生が注意しているのに、子供が一人頑張っで事故をおこした~~etc~~の記事を読むと、医者としての責任かどうかと悩みは尽きない。

最近、水泳中の心電図をとる装置が造られ、水泳中に一時的に短時間心停止のくる例も発見されているとの事、このような機械もわれわれのところに速やかに普及して欲しいものである。



狂っていないか

福光町高宮
西 勝

殺

いまの世の中は少々狂っているような気がする。毎日の新聞やテレビその他さまざまな報道がなされているが、これは嬉しいと思われるものはきわめて少なく、その扱い方、これは恐いことやなことを思ふ報道に比べると、小さく片隅に片つけられている様に思われる。強盗強姦たる犯罪の件数は世界中一番少ないといわれるが、これまでに比べると確かにふえている。昔はあき葉ねらいといって居人不在の間に盗みをはたらくのが多かったが、いまではピストルや包丁をかざしておどし、あるいは家人を縛りあげたりして持ち去るという例が多い。また、昔は私たちが尊敬するのが当りまえであった先生取り囲んで暴力を加えろといった例やその事例は稀れであるが授業中に随ってアルコール飲料を飲むという、一寸考えられぬ例も報ぜられている。彼等にはそれなりの言い分や不平不満があるのかもしれないが、また先生のなかにも、生徒との対応にふさわしくない行動するという場合があるかもしれないが、それにしても暴力沙汰にでるといふのは、老年者には何としても解しがたい。

政治に対しても私は素人であるが、新聞でよんだり人から聞かされるところ

によると政治も亦狂っているといふかお互にか選んだ私達の代表者が正しく潔白でないことをやり、平然としている例も少なくない様である。何はともあれ資金獲得と自己の栄達や派閥の為党派の為なら献身的な努力をするが、国家国民のためと真から心配している議員は少ない様に思われる。例へば整備新幹線にしても国民は着工を望んでいないのに一部政治家が利用せんとする自己満足のためか、又は次の選挙の集票につながるでも思っているのだろうか。国民はかかる政治路線を望んでいる人はいない様に思います。全く国責の無駄責いと思います。これではいちばんみじめなのは国民であるというのも無理はない。いまの世の中は、まさに狂っているといしか言いようがないかもしれぬ。



さらなる発展を願って

斉藤 外茂

畏くも昭和天皇が一昨年秋病床につかれて以来、毎日の新聞やTVを通して、手術や輸血等のご経過に執心しておりました。明治の同年生まれの私共には、筆舌で表せない感慨が湧き出ます。大喪の礼が終り、やっと我にかえった思いです。新しい平成時代を迎えた日本は世界のリーダー国としての品位を備えていなければならず、今上陛下の役割はさらに大きなものとなるでしょう。皇室の御安泰と国運の隆盛を祈らずにはおられません。この年に『昭和だより』100号記念となり編集者各位のご熱意に敬服すると共に、今後一層の発展を期待します。私事ですが、昨年皆様より初の米寿祝をお与えいただき、小生誠に光栄でした。また暮に入院の折は、心暖まるお見舞を賜りました。わざわざお届け下さった桐沢先生の御足労とともに厚く御礼申し上げます。この紙面を通じ謝意を表します。本当に有難うございました。



週休??日

市立浜波総合病院小児科
嶋 大二郎

子供が小児科を受診する時に、父親が同伴してくる姿がたいへん目につくようになってきました。もちろん退きならぬ事情で父親がついて来ざるを得ないことは昔からあったのですが、近年段々増えてきて気のせいかわ役所の土曜開庁が始まったこの二月から一層増えたような印象を土曜日の外来をするたびに強

く受けます。

診察を受けるのは子供なのだから誰がついてこようと問題はないと一般の人々は考え勝ちのようですが、小児科医師の立場から見れば診察以前の問題として病歴がろくに取れないという基本的かつ最大^の問題に直面するというわけです。父親は主訴を知っていてもそれが何時からなのか、どの程度なのか、他の訴えはないのか等のこちらの質問にちゃんと答えられる人は少なく、最悪の場合主訴そのものさえ知らずにいる人があって驚かされます。患者（子供）が Anam-
nese を全て語ってくれるくらいならばむしろ同伴者はいらな^いといえましょ^う。偉そうな事を申しましたが、私自身もしも自分の子供を医者に見せにい^っ
たらやはり多数の父親と同じでいたらくだと思^います。

父親達の休日が増えつつあります。逆に外で働く母親が増えつつあります。特に砺波平野はその傾向が強いと聞きます。そのような環境の中で休みの日く^らいは父親が医者についていくというのは自然の方向なのかも知れません。しか^しそれならばそれで世の父親達はもう少し自分の子供をへいぜいからよく観^察しておき、不調になれば時間の許す限りつきあってやる、あるいはそれがだ^めならばせめて病院に出かける直前にでも母親から子供のここ数日の状況を教^えてもらうなりメモに書いてもらうなりの配慮があっても良さそうで、最近母^親を対象とした講演を依頼されるたびにこんな話題を盛り込むようにしていま^す。しかし私個人の意見としては、やはりベストは母親、次いで昼間祖父母に^預けてあるのであれば祖母そして祖父がよく、残念ながら父親が最下位（自分^も含めて本当に嘆かわしい限りですが）だと考えております。

さて大企業や役所に勤める人達の休日が増えつつあるようです。しかし中小^{企業}に勤める人や我々医療人の休日は削られることは有っても増えることはあ^りません。日本人は働き過ぎだと欧米諸国によく叩かれています、医療人は^働き過ぎだといって叩いてくれる声はどこからも聞えてこないような気がしま^す。



砺波に来て15年

砺波総合病院内科
杉本立甫

私が初めて砺波に来たのは昭和49年4月です。はじめてみる砺波厚生病院^は廊下も暗く、看護婦も年をとった人が多く、なんともすごい所に来たのでは

ないがと思いました。その当時おいでた先生で現在おいでる先生は小林先生、永森先生、高田先生だけとなっています。当時内科には永木院長と大学から派遣された2人、合計3人のスタッフでやっていました。1日の外来患者数30人ぐらいであり、入院患者は脳卒中後遺症の患者が多く、3~4年入院している人も何人かいました。若かったこともあり、やみくもに仕事をやったことを覚えています。

昭和49年に砺波に来たときの相棒の先生は、現在石川県で開業されていますが、その当時はまだ若く、朝は病棟の婦長の電話で目を覚まし、病院へ出ておいでるのが日課でした。夜はよく大学へ行かれたため、病院に居られず、なにかあると私の所に電話がかかって来たものです。その頃は夕方5時頃になると外科からの電話で呼び出され朝まで酒を飲みながら麻雀をしたものです。現在の小林院長のその頃の言葉“午後5時になって仕事の終わらないものは頭の悪い奴だ。” そのような生活をしていたため6ヵ月の出張の間に5kg 体重が減りました。今から思うと随分耳茶苦茶をやったように思います。

それから15年経ちましたが病院は大きくなり、内科のスタッフも8人となっています。専門外来も糖尿病・内分泌・循環器・呼吸器・血液・神経内科・腎・高血圧・消化器・肝臓とあり、医師も金沢大学第一内科、第三内科、神経内科、金沢医科大学呼吸器内科より派遣されています。今後さらに病院の発展のため質量とも充実したいと思っています。



私の昭和史

千保延江

大正と昭和の変わり目に金沢で生まれ、幼時京都で暮した私は、昭和天皇の即位の御大典の“あと拝み”に御所にも連れられて行ったそうだが全く記憶になく、唯祇園の都踊りの華やかな舞台の一コマだけを鮮やかに覚えている。

幼稚園は大阪で、小学校は金沢で、低学年の時、満州事変が始まり、出征する連隊の太行進を尾張町あたりで人垣の中から見送った夜の緊迫した雰囲気と軍靴の響が今もありありと蘇ってくる。2、26事件のラジオのニュースを聞いたのも小学5年位だったかと思う。

県立第1高女に入学した年の7月、日支事変が始まり、父も出征し、私は継母継妹と暮す事が嫌で、幼児の時から特に愛育してくれた叔父母の許へ逃れ、

父の了解を得て、県立高岡高女に転入学した。卒業迄の3年間は少しずつ戦時色が濃くなるものの、学期休みには大阪の伯父の家へ遊びにゆき、伯母に道頓堀の中座や角座の芝居見物等させてもらったり、まだまだ平和な時代だった。昭和16年12月8日太平洋戦争に突入した。17年4月帝国女子医専に入学上京した。3年生の昭和20年になると、連日連夜の空襲警報に、授業と退避との繰り返しで、遂に20年4月母校は焼失した。6月長野県羽黒下の寺院その他で合宿が始まり、教授方も満員列車で、東京から一週間交代で集中講義を続けて下さった。間もなく運命の8月15日が来、9月初め私達は前からの約束で会津若松に再疎開し、方々の病院で、ポリクリをさせて頂いた。昭和21年東京で生活のめどのついた者から帰京し、焼残った都内の病院でポリクリをさせて頂いた。もうすぐ卒業と云う時、アメリカの意向で、破壊のひどい学校の廃校。医専を5年制から6年制にする方針との情報が流れ、教授も学生も、それぞれの筋に飛び廻って、どうにか廃校は免れ、又5年で卒業出る事になったが(帝国・東京・大阪各女子医専と5年制男子校2校)指定する病院で一年間インターンの上試験に合格して始めて医師免許がいただける事に新制度が出来私達の学年は4月にやっと卒業する事が出来た。本もノートも焼失した者が大半で、国家試験は四苦八苦で合格した。温く励まして下さり、快く貴重な御本をかして下さった先輩諸先生の御恩は今も忘れ難く感謝している。めざましい医療の進歩の中で息子も母校医大を卒業後医局勤務10年になり、私達の分まで勉強して欲しいと希っている。

馴れない山里での開業も色々と困難だったが少しは無医村でのお役にも立ち、道路と総合病院の素晴らしい発達で救急体制も完備された。円高と世の風潮に便乗して海外にも度々旅行し、苦楽相半する昭和の御代を過ぎた事になる。今新しい平成の御代を迎えこれからの医業の多難さを思う時、若い先生方が新しい苦難を克服して頑張り抜いて頂きたいと切に祈りつつ、微力を尽して余生を送りたいと願って居る。



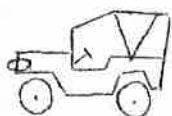
元年の春

高田 外喜雄

いつしかに 新元号も 耳慣れて

暖かかりし 冬は終りぬ

満開の 桜をめぐり 殊の外
平成の世の 春をよろこぶ
元年の桜は すでに散り初めて
この一年の 行き方を想ふ
春の夜は 値千金と知りながら
成すことも無く 日数過ぎ行く



交 通 事 故

匠 勝 則

昨年10月30日、津沢在住の小学同級生より往診依頼があり午後3時頃帰路についた。津沢交差点で停車し福野方向に進むと前方約15m位を雨合羽きた老婆(68才)が自転車であぶながしそうに走っているのを発見した。この県道は対向車も多く、充分前方の安全に気を使って時速25~30キロで運転していたが、この老婆が後方の安全確認もせず、手もあげず急に右折した。とっさのことだったが一応用心していたので急ブレーキをかけたが、路面が雨でぬれていたのもあって、車は約1~2m前方で急停車したが、自転車の斜後方に接触。老婆は転倒したが、すぐ自分で立ち上がったが、一応救急車で病院へ搬送していただきました。脳外科は異常なし。整形外科でも腰部打撲症のため約1週間の安静を要するとの診断で入院することもなく自宅に帰った。この間私は警官の実地検証を受けたが、警官は当方の事情説明をろくに聞きもせず、一方的に加害者として罪人扱いの如き態度だったので、私も頭にきて相当やりとりしましたが、結局「前方の安全不確認」と言うことになりました。この「前方安全不確認」と言う言葉は警官にとって非常に便利な言葉らしい。

当然、老婆宅へ毎日お見舞に行きましたが、5~6日程たつと昼間見舞に行くと不在が多く、確かめてみると近所の友人宅へ遊びに行っている様子でした。そして本年4月11日、5ヶ月余も要して、やっと示談が成立しました。治療費、慰謝料(主に通院費)、そして自転車の新車等で金額的にはたいしたことはありませんでしたが、新車の要求には不満を感じました。70才近い老婆が自ら転ぶ車に再びのって事故を起こし、又新しい加害者が作られるのでなからうか? 最近高令者の交通事故が増加していますが、前後左右の安全も確認せずに右折左折は勿論のこと、赤信号でも堂々と無視しての交差点進入を時々見

かけます。それと中・高校生の2列〜3列横隊の自転車等々自動車を運転していても神経が参ります。

数年前「赤信号、皆で渡ればこわくない」と言ふ言葉を耳にしましたが、そのうちに「赤信号、高令者1人で渡ってもこわくない」という言葉が出来るかもしれない？

交通行政者、警察も、自動車運転者同様に高令者のバイク、自転車使用者にも講習なり、運転免許証を発行するなり、何等かの対策をしなければ、この種の事故発生はふせげないのではないのでしょうか。高令者の自転車が急に右・左折したり、風圧でよろけたりして、自動車運転者がこれを避けるためハンドルを切って中央線に出て、対向車と正面衝突という大事故の発生もあります。その直接の原因である高令者の自転車は我関せず、悠々と前方のみなたへ走り去る。クワバラ、クワバラ。



リクルート事件に思ふ 谷 村 芳太郎

新聞紙で毎日の如く掲載されて居るが、政府高官に公募前のコスモス株を、政治資金の名目で、譲渡を受け、莫大な金額を儲けて、住宅を買ったり、収賄の容疑をもたれて調査されて居る人々が多いのに驚く。人間には程度の差こそあれ財産欲、名誉欲、出世欲をもって居る。政治家は多大な政治資金を必要とするが、節度を過ぎると禍となる。

いやしくも国民を指導する立場にある人々は、常に身辺をきれいにすべきです。現政府に対する国民の支持が非常に悪いと報道されて居る。一日も早くリクルート事件が解決する事を望んでやまない。



特集号によせて 津 田 達 雄

56年1月、杏和だより特集号(50号)を発行するために、年末より原稿集めに歩き回りやっとな集まった頃より56豪雪となり、投稿文の中にも大雪に関するものが数編みうけられた。

表紙も玉堂の四季より、大雪の中にうもれた農家をえらびました。今回100

号(特集号)を発行することになり、再び編集委員の一人としてタッチすることになった。今年の冬は記録的な暖冬で花見も早く、チューリップフェアも一週間早く開催されるとか！。余りにも対照的な大雪と暖冬の気候の年に発行される特集号は忘れることは出来まい。次の150号の頃は60才台、北陸新幹線、高速自動車道も縦横に歩き、世の中は様変わりしていることでしょう。

世の中は10年を一区切りとして、大きく変転しながら進化・発展をとげるようです。令和だよりも、そろそろ様式を変え、新風を吹き込んでいかなければと老婆心が頭をもち上げて来そうです。



「みどりの日」を思う

福野保健所
中川 昭 忠

祝日法の改正によって、天皇誕生日が「みどりの日」と改称されて、最初の4月29日がやってきます。

この「みどりの日」は、“自然に親しむとともにその恩恵に感謝し、豊かな心をはぐくむ”という趣旨の祝日と規定されています。こういう趣旨の祝日が設けられること自体は、極めて意義の深い事であります。それが亡くなられた昭和天皇が生物研究に非常に御熱心であったという思い出につながる事でもあります。

しかし、私自身の思いをいわせてもらえらば、史上最長の在位をとげられました昭和天皇のゆかりのまま「昭和の日」でよかったのではないかと思います。政府と立法府はあくまでも無難な結論を選んだもののようです。

私が「昭和の日」というのは、かってない激動と転換の昭和時代に生れ、育ち、めまぐるしく変貌した60年間を経験したからであって、強い天皇崇拝の立場からではありません。この昭和時代を生きてきた多くの国民の辛苦と感慨を後世に伝える記念日が、一つぐらいあってもよいのではないかと思います。

元号というものが、天皇の統治の記号から時代そのものの象徴に変わったのも、この昭和の時代が初めてであります。そういう昭和という時代の戦争と平和の日本史を、国民の念頭に残すことに、もっと意を用いる必要があるのではないのでしょうか。それも明治維新から近代国家建設への意気込みの光と影の歴史が、もはや「文化の日」を祝うことで国民が思い起さなくなっているように、いず

れ昭和の歴史の悔悟と教訓も「みどりの日」の休日の“ごわめき”の中に忘れ
さられていくように思われ、何か心にむなしさを感じ得るのは昭和一桁生れの
私一人だけでしょうか。

(平成元年4月/5日原稿×切前)



春の一日

中島よし子

この度年号改正に当り身辺を整理し風通しをよくしようと思う。

整理と云っても種々でしょうが、私は苦手の質で身の廻りはいつも煩雑し無
駄が多いから少々片づけ、日常生活を円滑にしようと思っただけの事です。過
ぎてきた開業医生活の間に5〜6回行なってきた事です、その度に筑に何杯
か廃棄してきている。抗結核剤、ビタミン剤、サルファ剤等々、薬にも流行が
あったなと思う。

今回も降圧剤、脳循環剤等の一部に思い切らざるを得ないものがあるだろう。
試薬棚に目をむけると、チルク液、ハイエム液、尚、さらに奥にジアツオ第Ⅰ、
Ⅱ液、稀塩酸、ヨード等々、腰椎穿刺セット、腹水胸水穿刺針等現われる。自
分自身が手懸け苦勞してきたものには仲々取り払えない愛着を覚える。

棚の片隅からボロボロになった3冊のハンドブックが見つかる。取りあげ拾
い読みする。

第一回版自序

羅馬ハ一日ニシテ成ラズ、三歳ノ児童モ亦三星霜ヲ経ザレバ其ノ令ニ達
セズ、物自カラ規矩アリ、然レドモ努カハ其ノ完成ニ達スルノ日ヲシテ短縮セ
シムルモノナリ。

本書生レテ茲ニ三星霜半-----云々

昭和十年十月

山田詩郎識ス

なんとすばらしく爽快な縦えでしょう。大先生の威厳の程がひしひしと感ぜ
られます。

「内科診療の実際」

西川義芳着

藥物療法 アミノピリンの項の一部に、一八九四年フレラウス市ニ開カレタ
ル藥学会懇談会後 Fi Le Hne ト Ammelburg ト一旗亭ニ豪飲シ、アンチピ
リン改良ヲ相約ス、翌日アンメルス前夜ノ言ヲ思ヒ起シ、数年前製作セル一葉

品ヲ机底ニ搜出シ「フィレーネ」ニ携ヘ試験ヲ括セルニ奏効待望ノ如シ、眞亭
辭後の一言ハ、実ニ「ピラミドン」出世ノ警鐘ナリキ、賢愚相距ル正ニ半葉ノ
紙、

又、アロームワレリル尿素、アロムラールの用量欄の一部分に、予ハ本剤ヲ
愛用スルニ際シ常ニ、「本剤ハ良薬ナルモ高価ナダケガ欠点ナリ」ト云ハレタ
ル青山胤通先生ノ言ヲ懐シミ思フ。大変味わい深い心情暖まる師弟の絆が感ぜ
られるではありませんか。私の若い頃には目にとまらなかったらしく詭後感が
思い出せない。

次第に暮れかかる陽ざしを受け、頁をめくれば最後に緒方洪庵の、石件十二
章 は扶氏醫訓巻末に附する所の所戒の大要を抄譯せるなり、書して二三子に
示し亦以て自警と云爾、安政丁巳春正月 公裁誌の時の一章に、病者の費用は
少なからん事を思ふべし。命を與ふるも命を繋ぐの資を奪はば亦何の益があら
ん。貧民に於ては茲に斟酌なくんばあらず。と

半世紀、一世紀、世情幾變遷の末今日の福祉社会となり、臓器移植、試験管
ベビー、人間の死が問われるとき医訓は如何ように解せられようか。

山田先生は又、本書ハ常ニ袖中ニ携帯シ と、云われ末尾には、他ニ便宜ナ
ル方法アラバ採用セラレタシ、と結ばれている。正にかくなくんばあらず、と
少々文語体を真似るはめとなりました。いつしか背は眾まり隣のテレビも止ん
だようです。



エルミタージュ 美術館 中 田 喜 夫

四日間滞在したソ連で、ただひとつ、高く評価したいのはエルミタージュ国
立美術博物館（以下、美術館と略す）の観光。当初、美術館の観光はレニングラ
ード市内観光のコースに含まれていたのに、当局から、入国後に翌日の美術
館の入館は不可能との通告。この通告にクループの全員が憤慨。若い女性添乗
員はわれわれの意図を察知して、当局と東京の旅行代理店本社とを交えて二日
がかりの粘り強い交渉の結果、翌日昼頃に、ようやく、午後三時半からの美術
館観光の許可がおりた。彼女によれば、ワイロ、われわれが外国人であること、
ならびに、女の武器である泣き落としの三つが決め手になったという。

美術館は帝政ロシア時代の宮殿を改築し、これに新、旧の美術館など四つの

建物を併合した広大な建物で、ネバ川左岸に面している。素晴らしいシャンデリアに飾られた豪華な部屋が数多くあり、数万点の美術品（所蔵の美術品は270万点）が展示されていた。普通的美術館と異なって、美術館の大きな窓からは、右側では、ネバ川の彼方に聳える高さ122メートルのペドロパブロフスク要塞の金色の尖塔が眺められ、左側では、半円形の旧参謀本部に囲まれ、その中央にナポレオン戦勝記念のオベリスクのある、世界で最も美しい広場の一つにして有名な宮殿広場とその彼方に高さ102.5メートルの聖イサク寺院の巨大なドームが見えた。これらの美しい眺望は名画鑑賞で疲れた眼や身体を休めてくれた。

また、美術館のなかには、歴史的な部屋がいくつかあった。ロシア革命の舞台となった白い食堂（孔雀石の間でケレンスキー政権の閣僚が逮捕されたという記事は間違っている）では、革命成立の時間を示す時計が午前2時10分を指して止まっていた。ピョートル大帝の玉座、そして、1812年戦争の間では、ナポレオンのロシア侵略と戦ったクツォーフ将軍以下数百人の軍人の肖像画を坐って見上げた。

西洋絵画を中心とした美術鑑賞は、まず、オランダから始まり、イタリア、スペイン、フランスと続いた。重苦しいムードの漂う宗教画、歴史画、神話画、肖像画、風景画などの名画が続く。最後に、旧来の西洋絵画の伝統を破ったフランス近代絵画の部屋へくると、肩の荷がおりたような解放感をおぼえた。

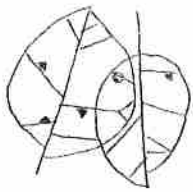
フランス近代絵画はバルビゾン派、前期印象派、後期印象派、ナビ派、ついで、フォービズムと年代順に並べられ、フランス近代絵画の流れを辿ることができた。ピカソ青の時代の絵画で名画鑑賞は終わった。

色彩のマライス・デッサンのピカソ。二十世紀を代表する両巨匠の絵画は、この美術館に展示されたものに関しては、シロウトの私にもよく理解することができた。しかし、後年のマライスの無重力絵画、ならびに、実際に見たピカソの名画『ゲルニカ』（昭和57年、スペインのプラドー美術館別館にて）などは私には永久に理解することのできない名画である。

このように、美術館の名画鑑賞の二時間は、あっという間に過ぎてしまった。共産主義者とイスラム教徒は伝統、文化、その他すべてのものを破壊する連中だというのが私の認識である。ロシア革命の混乱のなかで、これら貴重な人類の文化遺産を、破壊者から護り、後世に残した同じ共産主義者のレーニンの見識と努力に対しては敬意を表したい。

館内では、フラッシュ撮影以外の写真撮影は自由であったが、この禁止されているフラッシュ撮影を平気で行い、美術館職員の激しい注意を受けていたのが日本人であった。同じ日本人の一人として情けない限りである。

われわれのグループのなかで、美術館の観光を最も強固に熱望し、激しく添乗員に迫った中高年のA夫人（失礼だが、美術に関して造詣が深いとは思われなかった）が、館内へ入ると、各展示室の椅子に坐わり、殆んど名画を鑑賞しなかった不思議な姿が印象に残っている。



「風の又三郎ーガラスの マントー」を見て

仲 村 洋 一

どっどど どどうど どどうど どどう
青いくるみも 吹きとばせ
すっぱいかりんも 吹きとばせ
どっどど どどうど どどうど どどう

谷川の岸に小さな学校がありました。

伊藤俊也監督の映画「風の又三郎ーガラスのマントー」を見ました。二人の娘に行かないかと誘いましたが、「一人で見に行けば」とあっさり断られました。母子家庭のような家となって久しい。

梅原 猛が昭和61年秋にNHKの市民大学で「私の最澄論」を5日連続で話したことがある。その折、法華経の教えを実践した現代の作家を知っていますか。宮沢賢治ですよ。と話された。以来、最澄に始まり仏教書を少し読んだり、又宮沢賢治をあれこれ読むようになった。

「あいづやっぱり風の神だぞ。風の神の子っ子だぞ。あそごさ二人して喰食ってなんだぞ。専校生の高田三郎は実は風の精又三郎の変装、変身であることを嘉助が夢の中で発見したところも、うまく画面にでていました。

「そんなことはみんなどこかの遠いできごとのようでした。もう又三郎がすぐ眼の前で足を投げだしてだまって空を見あげているのです。いつかいつもの鼠色の上着の上にガラスのマントを着ているのです。それから光るガラスの靴をはいているのです。

又三郎の肩には栗の木の影が青く落ちています。又三郎の影はまた青く草に落ちています。そして風がどんどんどん吹いているのです。又三郎は笑ひしなければ物も云いませぬ。ただ小さな唇を強そうにきつと結んだまま黙ってそれを見ている。いざなり又三郎はひらっとそらへ飛びあがりました。ガラスのマントがガラガラ光りました。ふと嘉助は眼をひらきました。灰いろの霧が速く速く飛んでいます。」

原作にはない少女「かりん」と病弱な母とを登場させていました。父の実家の祖父が、かりんを養女にし、母親は療養所に入るように事を運んでいきます。大好きなお母さんと別れたくなくて悩む少女。森の秘密の隠れ家である大木の虚(うろ)にもぐり込んで眠りこんでいると、風が吹き出し、大木のこずえに風の又三郎が現われる。

きれいな緑の自然を見ていると、子供の頃走りまわった野原、どじょうや鮒のたくさんいた小川、草いきれする程の大きな雑草、光り輝く森等が、臉の裏でだぶって仕方がなかった。

「山川草木悉皆成仏」自然を大切にしなければと、誰しもが思う映画でした。



司馬江漢という人 永森文大

いつのまにかしみじみとした情感の世界は覚えるものの、感動に身を震はせることもなく、心血をそそいだという言葉などは口にするだけでもいやらしく、気負って大上段にふりかぶったものの言い方は全くできなくなってしまった。無気力なのかなと思うとそうでもないし、情熱がなくなったのかなと自分をみつめてみると、少しぐらいい残っているだろうなという感じはする。要するにいいかげんなのがと自分に聞くとそんなところかなと肯定したくなるのである。

そんな人が昔いなかったかと探してみても歴史にそんな人間が残るはずがなく、似たようなものも現れない。しかし江戸時代に司馬江漢と名乗る変な男がいたことを知った。彼は文化・文政の時代に生きている。その生涯を眺めてみると、後世に名を残す者になりたいと晩年に至るまで思い続け、頭の良さと手先の器用さが抜群で、何でも一応はこなしてしまう、しかもその変人ぶりは驚くばあはない、というのが私の感想である。

何をやったかというと先づ狩野派の絵師を志す。次は刀鍛冶、次に金工家に

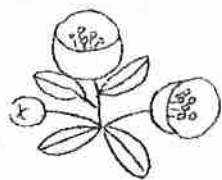
なろうとする。それらもあきらめてその頃の中国の画風を学ぶ。更に鈴木春信という浮世絵師の美人画に熱中する。春信の贋作を書いて本物と間違えられ怒ったという。それもやめて今度はオランダの西洋画、銅版画や罌機に心をひかれるのである。罌機とはコーヒー挽機（く江漢の表現では阿蘭陀茶臼）、陶製人形、陶器などである。ついに長崎で三年間勉強しようと思いつに至った。江戸を出て送って来た妻子と一緒に神奈川の宿で泊まった。その時の別れが余りにも綿々としているので宿屋の主人に「そんな調子じゃ長崎まではおぼつかないよ、伊豆・熱海で湯治して江戸へお帰り」などとがらかわれている。それで熱海で半月も滞在してしまったとのことである。何といういかげんさかと思う。その後、駿府（静岡市）に入ると、持って来たオランダの器械をみせたり、金持ちの武士に絵を書いたりしておれをもらい、色町にしけこんだりしている。ホームシックにかかって「長崎まではあぶないぞ」と言われて少し逆もどりもしている。そんなことをしながら半年で漸く長崎に到着した。銅版画などの絵だけでなく、窮理談（く物理化学）や天文地理なども学んだ。後年に彼は地球図や天体図を作り、紀州の殿様には地動説を教えている。67才の時に自画像入りの辞世の語を刷り物にして知人に配った。それには悟りを開いて病気で死んでしまいましたと書いてあったという。春尊も届くだろうし、自分の知名度がどのくらいか江漢自身で知りたかったのではないかと書いてある。死亡通知をしたあと無神論的な老荘思想に傾き世間との交際を絶つようにしたらしい。私はこの「なんでも屋」で、その実生活は全くしまらず、良い仕事は残しているが、変人でも有名になってしまった彼に興味を惹いてならない。残した歌に

老いぬればくうてひりぬくばかりなり

つるみもやらぬ身こそはかなさ

とある。まさに、何じゃこれは、である。

ハナ一才で死亡とあるが正しくは七十二才、自分で勝手に九才水増しした。本名 安藤勝三郎、司馬江漢は中国絵画を学んでいた頃につけたのかも知れない。

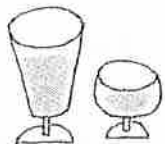


勉強会

南部 芳

小生の勉強会参加意欲は抑も日医が打ち出した生涯教育以前に始った。理由は日頃不勉強で現代医学の詳細な知識については皆無であるからです。年令的

に吾々は思考力、判断力、記憶力の減退は否めないが、丁度横綱に胸を借りる禪かつぎの力士のように闘志を燃やし何回でも繰り返しぶっかって行く様相と全く同じ意気込みで、何か一つでも二つでも知識を物にしようと意欲を掻き立てた訳です。始めは難しい理論はチンパンカンパンでしたが、回を重ねて聞きますと、脳細胞が適度に刺激されるのか次第に不透明から透明になるものです。尚、ボケ予防ともなり、一挙兩得です。さて、勉強会の内容ですが、各科にわたり吾々プライマリーケアを受け持つ開業医には申し分なく講師は大学教授が最も多く次いで助教授、講師及び日本中の大病院の院長の肩書きを持った方々です。ご承知のように主催も日医、県医、郡市医から各地区医師会の循環器懇話会、消化器懇話会、臨床病理懇話会や心身医学懇話会、神経医学懇話会等々です。その外X線読影会は各地区の官公立病院で、所謂病診連携で実施されており、全く多岐に亘っております。更に楽しい側面を申しますと回を重ねる度に例えば富山医薬大の第一内科矢野教授第二内科篠山教授第三内科佐々木教授整形外科辻教授、外科山本教授、脳神経外科高久教授、金沢大学竹田教授、金沢医科大教授等々顔見知りとなり、尚又、富山、高岡その他各地区在住の好学の諸氏の知己を得て愉快な懇親会を過ごす事です。文献を調べるのも結構ですが、多くの時間を要しますので勉強会に出席された方が有利と存じ、会員各位に推奨する次第です。



所属団体を考える

城端厚生病院内科
根 井 仁

昭和62年1月に現在病院へ赴任以来早や2年余が過ぎようとしている。一般病院のため間口が広くなり、従来加入していた学会に加え、広い領域の診療が必要となり、また、地元出身のためもあり地元の各種団体に加入せざるを得なくなってきた。以上の理由で各種の加入団体がどんどん増え自分でもどんな団体に加入しているか忘れる時もある。そこでこの機会に加入団体を整理、列記してみることにした。

まず地域社会の団体として「南砺農業組合員」およびその「農協総代」、「砺波森林組合員」、「城端山岳会員」等々、加入学会は「日本内科学会」、「日本消化器病学会」、「日本消化器内視鏡学会」、「日本肝臓学会」、「日本脾臓学会」、「日本消化器集団検診学会」、「アルコール医学会」、「日本産業衛生学会」、「ア

ルコールと肝代謝研究会」、「アルコール問題全国市民協会」、「食道静脈瘤研究会」、「日本透視療法学会」、「日本循環器学会地方会」そして「日本医師会B会員」、「砺波医師会広報・学術委員」、「国際青少年研修協会」最後に忘れかけていたが「医学博士」、「金沢医科大学非常勤講師」、「城端厚生病院内科医長」の肩書きもある。またス・3の研究会に所属しているような気もする。また、これから加入しなければならない地域医療に関する学会もある。毎年の年会費も馬鹿にならないし、全ての学会誌に目を通し精通している訳でもない。しかしまだ少し勉強したい気もある。困った一種のコレクターのようなものであると自分でも思わざるをえない。



左房粘液腫

野原正雄

5年前の初冬のある日のことである。流感の高熱のある若い女性の心音に、私は突然緊張した。今まで聞いたこともない異常な心音である。そして断層心エコー像に息をのんだ。左房内にダイナミックに流動する粘液腫である。今まで無く自覚症状が無かったという。書物では得られない感動の一コマである。その一瞬が今でも忘れられない。心エコーを始めて間もない頃のことであった。

その感動も月日と共に次第にうすらいだ昨年の晩秋のある日のことである。めまいと嘔吐で倒れる様に入って来た60歳の女性の心音に、私は不安をつのらせた。病院に入院して種々の検査をしてもらったが、原因は不明であったという。病状の変化が瞬間的である。ヤせている割に心音が弱い。心電図に不完全右脚ブロックがある。心エコーを行ったが左房の断層像が出ない。なぜだろうか。私はあせり気味だった。部位や体位を変ると一瞬あざやかな心房全体をおおう様な粘液腫のエコー像が得られた。久しぶりに身の引き締まる様なひとときであった。その後死ぬかと思われる様なエピソードがあったが無事に手術を終えて全く元気になられた。

私が手術を依頼した専門病院の3500例の心臓手術の中12例が心臓の粘液腫であり、その中の2例が私の送ったものである。人口15,000人の私の町に何人の同疾患がいるのだろうか。心エコーの普及に伴って無症状のものや、心症状を訴えない心臓粘液腫の発見は多くなることでしょう。

然し、見逃せば死の危険性を秘めた医療^{はざま}の狭間にある患者の一つではないだ

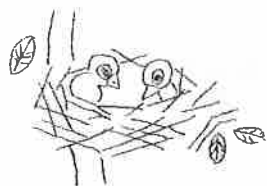
ろうか。



知らぬが佛

平川 秋彦

医師として三十年余り、今昔の医療の進歩はめざましい。今から思うと昔の医療の何とまずしい事（当時はそれなりに通用していたのであろうが）検査技術の進歩と相まって、診断が易くなり、新薬の出現である程度現時点の医療が存在している。しかし現代でも未知の所がたくさんあること、再なる新薬の出現でこれからの三十年後は同じ思いをすることであろう。要はその三十年をいかにして少しでも埋めるかであり、その為に生涯教育が重要になって来る。今から十数年前は閉鎖的でその場がなかった。最近になって勉強会が多くなり、その場を得、近代医学にふれるにあたり自分では出来なくても、その様な事が出来る、又あると言う事を知るだけでも現実の診療にあたり責任を感じて患者の為、より高度な診療が出来る機関にうつすことになる。これが病診連繫の大切さであり、ある意味では生涯教育の場で現代医学の進歩を学べば学ぶほど自己の未熟を自覚する。知らなければそれなりに可能な事もあろうが、医療では知らぬが佛は許されまい。その時は定年の時で、それは各自で決めることである。恐いのは己を知らずに老いることである。



しじゅうから

伏木 唯和

昨年がら庭に小鳥が巣をした。ビール樽に似た陶器の椅子の中である。両側に持ち運ぶための小さな穴があるが、そこから雀より一回り小さい鳥が出入りしているのに気が付いた。

全身が暗灰色で、頭が黒く頬が白い。腹部に太い黒線があり、背面に黄緑色部があり、しじゅうからである。この鳥はわりにどこへでも巣を作り、人間が取り付けた巣箱にもよく卵を産むとのことであるが、まさか、置いてある椅子に巣をするとは思わなかった。

昨年の二月初旬、15年我が家にいた犬が老衰で死んで、邪魔されることがなくなったのでやってきたのかも知れない。

今年はどうかと案じていたが、去年より早目に巣づくりをはじめた。隣りの別の椅子にである。

早春になると、アンテナや電線で啼いて相手を呼ぶ。ラブコールである。そのうちにペアになって巣づくりを始める。夫婦仲良くいつも一緒である。一羽が巣に入っている間は、もう一羽が必ず付近の木の枝で囀り続ける。今は安全だよと合図しているのであろう。危険が近づくと啼き方を変えて知らせるに違いない。杳和だより100号が出る頃はもう雛が巣立っていることだろう。

冬の間、雪囲いの竹の上に林檎を置いてみた。ひよどりがよくやって来て啄んでいた。この鳥は顔に赤茶色の斑があるだけの暗灰色の見栄えのしない鳥である。啼き声もギャー・ギャーとだけで面白くない。

時々おながが集団で来る。背中が青い尾の長い綺麗な鳥である。この方が大きいので、ひよどりは追い出される。そばの枝でわめくだけである。

春になると、じょうびたきも来る。頭が銀白色、全体は赤味がかった茶色で、背面に帯黒色部があり、翼には白斑と、仲々派手で可愛い鳥である。

その他すずめは勿論、せぐろせきれい、はとは分るが、図鑑や双眼鏡を探しているうちに居なくなるのも幾つかある。広くもない庭であるが、気を付けて見ていると退屈しない。野山へバードウォッチングに行きたいが、ゴルフと季節が重なるのが残念である。



少年期の

スポーツ活動について

砺波市

藤井正成

世をあげてスポーツ。スポーツという時代になって来た。体力がないし、スポーツは、嫌だということで文化部を選んでも、基礎体力の増強ということで、筋力増強のトレーニングをするようである。確かにスポーツをすることにより、チームワークをとることによって、社会的協調性の養成、体力的に自信を持つことにより人生を活動的、積極的なものにするという利点があるけれども、その反面、過度のトレーニングによる構築学的支柱組織に障害を惹起することも忘れてはならない。極端な例では、力士の変形性関節症、腰椎分離症等々の多いこと、更に内科的疾患も多く、平均すると短命である。それは、20才位迄に相模に適するように人工的に体を作ることから始まる。

そこでクラブ活動の現況をみると、小学校3年生位から、スポーツ少年団として、野球、サッカー等に始まり（ひどい時は幼年期から始まり）中学生になるとクラブ活動を強いられる。ここで問題になるのは、1年から3年まで全員が同じ訓練と運動量をこなさなければならない。出来る生徒と出来ない生徒があるのに拘らず、「根柢がない」と言われて、無理強いされている。そしてスポーツ障害を起こすものがある。それぞれのスポーツにより肘関節、膝関節、足関節の障害、腰痛、疲労骨折等々がある。概して小学生では上肢の障害が多く、中学生は下肢、高校生は腰部が多い。これらのことを顧みると、クラブ活動は、十分な医学的知識を持った指導者と、生徒の体力、智力、環境などを考えて、ABCの3段階位に分けて実行すべきである。かつてのマラソン王、日比野氏曰く「健康な者は走れ、弱い者は歩け、病人は医者に行け」と、全くもって、名言である。



スイセン

福井 悟

数年前、我が家のグリーン・プランにとりかかった。病院の南側に東面に長い広めの花壇を造り、その南端に一列に貝塚伊吹を配し、手前にはそれまであちこちの空き地に散らばっていたスイセンの球根—これは開業記念に親戚からいただいたものであるが—を掘り上げ、縄定規に沿って患者さんや職員の皆さんと一緒に丹念に移植した。近年漸くリボン状の葉丈が揃ってきてシーズンには清楚な花をつけるようになった。

今年は記録的な暖冬で雪らしい雪も降らなかったためか、花のつきは例年になく良いようで、その咲き誇っているさまは見応えがある。

この花壇では白いラッパスイセンが主であるが、越前海岸で知られる背丈があり、一つの花茎に数個の花をつける房咲きスイセン、黄色でいかにも頭の重そうな八重咲きスイセン、今では細目の葉だけになっている早咲きの寒咲きスイセンの数株も仲間入りしてなかなか賑やかになってきている。

スイセンの花は何故かどの種も花茎に横向きについている。こちらの気を引くようにいかにも誇らしげなマニー型、ひっそり術きがげんなメランコリー型、ツツとすまして知らん振りのツッパリ型等、その気になって見れば花の表情はその時々実にさまざまである。

県花チューリップ、クロッカス、今はまだ蕾の牡丹や癪菜も、この花壇にあっては圧倒的な数のスイセンに遠慮して肩身が狭そうである。

暖かさにつられてつい窓を開けたくなってきた。目の前にデリケートな特有の香りを漂わすスイセンの花は今日もちよっぴり疲れを癒してくれた。

満開の時もそろそろ終わりを告げようとしている。お礼肥をふんばつして来年を期待しよう。



肥満金魚

藤 永 洲 一

診察室に熱帯魚と金魚の水槽を置くようになって15、6年になる。

最初の頃たま郵便局へ行く用事が有って、局の受け付けの横の方に金魚鉢がおいてあって、びっくりする程大きな金魚がゆうゆうと泳いでいるのを見て、いたく感動を受けた。

それ以来金魚の方は、個性を全く無視してランチュウをただ大きくする事を唯一の目的として一年中食べられる限界近餌を与えました。結果水の汚れもひどく、日に三回程水交換に迫られ、病気にもかかり易くなりました。

人工餌には成長ホルモンの混じったものもあり、量さえ増やせば、体の成長も早く5、6年で、巨大肥満金魚に育つが、人間の肥満児と同様運動を伴わないで、体だけが急に大きくなり、背びれを上にした姿勢を保つこともできず、餌を食べる時以外は大抵腹を上にして、迎向けに引っくり返って、何ともみっともない姿勢で浮かんでいることが多い。

魚が背びれを上にした姿勢を保つためには脇にある小さなひれを絶えず動かしていないと死んだ魚に見られるように、迎向けに引っくり返るものらしい。

急に無理に大きく育てられた金魚では胸びれを動かす筋肉の力が体の大きさに伴わず、背びれを上にした姿勢を保つのが困難と思われ、すぐ迎向けにひっくり返ってしまい、外来を訪ねる子供等によく「この金魚死んでいるよ」と誤まって指摘される。

急速成長肥満金魚は脂肪過多のためか、寿命が短いし、病気にもかかり易い。金魚の病気は外から変化が目立って判っても数ヶ月存命し、医師という仕事の見栄もあって病気の魚に対しては、水温を上げたり、色素性殺菌剤や抗生

物質等、ペットショップの市販薬より高価なものを使って見るがどうしても治らないものも残り、ザルに入れて庭の池に浮かべておいた処、カラスの餌になってしまった。

色々あって二匹残り、補充すべきかどうか迷ったが、診察室が手狭であったので池に放して水槽を片付けた。

その後外来を訪れる子供等にショック「金魚死んだがけ」と問いつめられ意地になって「池に全部放した」と、うそを混えて見栄を張っている。



学会随想

正木明夫

最近の学会はどこも大盛況である。最新の器械を駆使した画像診断による知見、物理化学的な各種の分析装置を使用して得られた各種のデータと稀有な症例の報告、新しい治療法の華々しい登場等々、数え上げれば切りがない程の情報の洪水である。一方曾っては一世を風靡した治療法が現在では殆ど省みられることもなくなった。新生児高ビリルビン血症の交換輸血療法などがそれに該当する。私は外科医ではないのでその方面についてはよく分からないが、同じようなことが十分あり得るのではないかと思っている。

そして特に感心するのは最近の若い医学者の洗練された話し方である。英語の発音なども非常にいい。私は昭和9年生れで昭和19年最後の年であるが、医学部では私の3~4年以上の先輩はすべてドイツ語であり、これが又実に堪能であった。私の年代で昭和30年頃からようやく英語の単語を使う講義がいくつかあって、結局はどちらも駄目となってしまった。私の年代はどうも自分の意見を表現する能力に欠けているように思われてならない。これは小学校へ入学してから終戦を迎えるまで（小学校6年生）、そして戦後の数年間困苦欠乏に耐えた日本の歴史と無関係ではあるまい。昭和34年金大小児科に入局して間もなくGOT、GPTの測定を担当させられた。IN HCl、IN NaOHから作らねばならない。アミノ酸の試薬を作っても溶液にすると作製日しか安定でなかった。今日では想像もつかないことだ。入局して数年間は現在の検査技師のような生活であった。これらの体験は論文を読むときに（外国語で話されても皆目分らない）何でも鵠呑みにしない習性を作ってくれたかもしれない。

最近の若い医学者はよく本を読みよく議論する。が欲を言えば「何を」、

「何のために」、「どのようにして」という一つのテーマを持ってもらいたい。
——を、ノーベル賞獲得のために、——にしてという発想でもいいではないか。



想 出 の 記

城端町
松 田 嘉 之

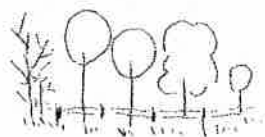
『杏和だより』100号発刊、お目出度うございます。創刊が、昭和45年だ相ですが、私が、城端町で開業したのも、同じ昭和45年ですので、同じ歴史の中を歩んで来たことになります。そこで、思い出す俤に20数年前のことを書き綴り、責を果したいと思います。

昭和40年当時の城端厚生病院は、紡績工場の寮であった当時の俤の木造建築で、障子と畳の病室が残って居り、手術場の壁、床は、モルタル塗りか、むき出しになって居り、手術のある時は、水を流し長柄のブラシでゴシゴシゴシとアオミドロを洗い落して準備をしたものでした。更に暖房は手術場の一隅にあるマキストーフで行い、その傍で、閉鎖循環麻酔器を使用しているとはいえ、エーテル麻酔を行ったものでした。全く乱暴なもので、今日では想像もつかないことです。

又、当時は、売血行為が禁止された為、極度の保存血不足で、血液の大部分は、大病院に押えられ地方の小病院にはなかなか廻って来ず、出来る手術も出来ない有様でした。

そこで、20才以上の城端町々民全員の血液型を調査し、血液台帳に一括登録、手術前に、患者又は患者家族に台帳を供覧し、その中から血液適合者を見つけ出し、各自が供血者と交渉してもらうと云う方法を考えつき実行しました。この方法は『城端方式』としてNHKの取材を受けたものでした。

このように、ふり返って見ますと世の移り変りの激しさに驚かされ、隔世の感が致します。これから更に20年、世の変遷は更に加速されることと思います。大いに期待される次第です。





蓬萊山

仙人学入門番外

福光

松村清年

『史記』 「秦始皇本紀」28年(BC 219)に、始皇帝が山東省の山々を巡遊し、泰山で天地の神々に祈る儀式を行ったことが書かれている。

この時徐市は琅邪^{じやふつ}で始皇帝に、

「海中に三神山あり。名は蓬萊、方丈、瀛州^{ほうじょう えいしゅう}。仙人が住むと言いますが、それがし精進潔斎して無垢の童男童女を引率し、神山に渡って仙薬を求めてきましようか」

テなことを云ったのである。

かねて不老不死を願ひ、仙薬に血眼になっていた秦始皇帝は、直ちに仙人求人作戦を展開する。

10年後の「秦始皇本紀」37年(BC 210)には、徐市が海外で仙薬を求めて奔走しているにもかかわらず、何年たっても仙薬はみつからない。すでにかんりの経費を費やしており、このままでは皇帝に叱られることは必定だったので、更に嘘を重ねる話がある。

『史記』 「秦始皇本紀」はこれだけであるが、おなじく「淮南衡山列伝」に伍被^{ごひ}が淮南王^{かんげん}を諫言する場面があって、そこに再び徐市が出てくる。

(秦始皇帝は)道士の徐福(ここでは徐市が徐福になっている。ジョフツとジョフクの発音の問題が横たわっている)に命じて海外に神仙を求めさせたが、徐福はひとまず帰還してがら、皇帝に次のように申告した。

『臣は海中の大神にお目見えしましたが、大神は、汝は西王(始皇帝のこと)の使者かと問われましたので、そうだと答えました。汝は何を求めているのかとの仰せでした。そこで、願わくは延年長寿の薬を頂きたいものと答えました。大神は、汝が仕えている秦皇はケチで礼物が薄い。だから、その薬は見せてはやるものの、取ってはならぬぞ、と申されて、臣を従えて東南の方、蓬萊山(東海にある仙人の住む山)に到り、芝園に囲まれた宮闕^{きやうけつ}を見せて下さいました。

臣はそこで再びお願いして、どのような物を献上すればよろしいのでしょうか

とたずれますと、海神は、良家の善童男女と、もろもろの工作品とを献じたら、薬を得ることができらるだろう、と申されました。』

これを聞いて始皇帝は大いに喜び、徐福に善童男女三千人を与えて派遣することとし、これに五穀の種をもたせ、諸々の工人をつけて出発させた。

しかし徐福はどこかの国にわたり、平原と広沢とを手に入れ、その地に留まって王となり、再び帰っては来なかった。-----。（『史記』平凡社版 野口定男訳から要約）。

ここに挙げた伍被は、淮南王の『淮南子』編述（BC 122）に参加した学者の一人で、徐福渡航の100年ほど後に生まれた人である。『史記』の著者司馬遷（BC 145-?85）とそんなに時代が離れていないので、この記事は全くのデタラメではなからう。

この種の伝説が各地に伝播した理由の一つは、中国古代文化の周辺諸国に及ぼした影響、つまりは中国礼賛思想の普及と、もう一つは、古くから大陸の人々が周辺世界へ植民、膨張したという事実である。現代の華僑の歴史は古代にまで遡るのだ。

徐福渡来伝説は日本列島各地に存在し、南の沖縄県八重山諸島から北は青森県にまで及ぶ。中でも和歌山県新宮市が有名である。

最近の海流実験の研究成果では、山東半島を出た船は、潮流に乗るとわが国の山陰地方にたどり着くという。出雲こそ最も現実性の濃い上陸地点だとして、古代出雲民族と徐福渡航集団を結び付ける説もある（『日本の古代 3』中央公論社）。

1984年、中国の教育関係の日刊紙『光明日報』に「徐福の史跡発見と考証」という記事が出た。徐福出身の村の実在が確認できたそうで、江蘇省鹽榆景金山郷、今日の徐阜村だ（じよふ）という。

「古代殷、周の時代、山東半島から南の淮河流域（わい）一帯に、非漢民族の萊夷（らいい）徐夷（じよい）が住んでいた。彼らは漢族からは越族同様、東夷と総称されていたが、なかでも徐夷の政治的活動は活発でしばしば周王朝と対立したが、やがて漢化されていった。徐福の先祖はおそらくこの徐夷と無関係ではなかったろう」とも説く。（『日本の古代 3』 P-205）

日本だけに限らず、同様の伝承は韓国済州島、台湾など東アジア一般にひろがっている。いずれも、『史記』の記述が下敷にある。済州島の徐福渡来伝説

には二説があって、一説では、徐福一行は不老長寿の仙薬を発見することができず、やむなく大陸へ帰って行った、という。もう一説は、漢^{パン}碁山で首尾よく不老不死の靈薬を見つけ日本へ渡るときに面^{メン}帰^{ギョウ}浦^ポ（西帰浦市）の正房瀑布という滝の岸壁に「徐市過此」の文字を刻んで行ったと云う。もちろん文献もなく、壁にあったはずの文字を見たという人も過去誰一人ない。

伝説の伝説たる証拠に、一切証拠がない。

涪州島は火山島で、かつては耽羅^{タンラ}国という独立国だった。ここには神秘的な開国神話が残っている。大昔は涪州島は無人島であったが、ある時突然漢碁山の北、三姓^{さんせい}穴^{けつ}、つまり地中から高乙那^{コウルナ}、良乙那^{ヤンウルナ}、夫乙那^{フウルナ}の三人が現われ、東方にある碧浪国^{ヘイラウコク}から来た三人の姫を迎えて結婚し、彼らの子孫が繁栄した、というのである。

東アジアの神話には天からの降臨伝説が多いから、地下からの出現とは極めて珍しい。

何時の頃の噴火であるかは分からぬが、島が活発に噴火している最中、全島熔岩に覆われつつあったとき、避難した耽羅国の原住民のうち、ここに隠れ潜んでいた三人だけが助かって生き残り、後世に子孫を遺したということではなかったか。

「碧浪国」、涪州島からみて東方の国は日本以外には存在しない。従ってこの島では日本から来た三人の女性によって子孫が繁栄したことになる。日本女性が関係あるとすれば、古代の海洋国家である中国、朝鮮、日本のダイナミックな交流が浮かび上がってくる。

秦始皇帝が最初に徐福に会見したのは琅邪であった。山東半島は東夷系種族の聖地で、海上はるか東方に、神仙島、永遠の生命の源泉のある島、日本がある、という信仰があった。古来、神仙思想が根強い地方である。

日本では蓬莱山が熊野三山（本宮、新宮、那智）にしばしば比定される。三山を蓬莱、方丈、瀛州に見立てる。

遠祖が半島からの渡来集団の頭領であったと考えられる奈良、平安時代の上皇、天皇が累代、熊野詣でを続けたという歴史的事実と、熊野修験道の発達とをダブらせて考えると、徐福伝説と重なって、日中韓をめぐる古代史の興味は尽きない。



会館への夢

水 木 明

私が砺波医師会へ入会させて頂いてもうすぐ5年になりますが、医師会館がないというのは少々不似合いであるというのが、私の当初よりの印象でした。以前より会館建設の構想はあったものの、諸般の事情により沙汰止みになったことも聞いていますが、当医師会は会員数からみても富山、高岡に次いで120名を数え地方医師会のトップであり、それなりの施設、形態が是非必要ではないでしょうか。ちなみに会館を有する医師会は、富山、高岡、魚津、滑川、射水で、滑川や射水のような小人数のところでも、それぞれ小さいながらも自前の施設で会員のコミュニケーションや勉強などに活用されているようです。それに比して当医師会や看護学院は、総合病院のご好意に甘えた病院の寄生虫的な存在のように思えてなりません。

ご存知のとおり現在の建物は近々都市計画により取り壊され、立ち退きの止むなきに至っています。また今回県の地域医療システムの構想が公示され、小矢部市と福岡町を含めた広域圏での発想が要求されるようになったことです。このような状況にあって、会館建設はもはや前進あるのみと思われます。

そこで私の夢ですが、会館、学院、臨床検査センターのみならず、急患センターを含めたものとして考えるべきだと思うのです。学院の将来についての議論はあるかと思われますが、現時点では一応併設という形態が望ましいのではないのでしょうか。また救急医療体制の整備は、今後最も必要な医療サービスの一つと考えられますが、現在の福野のセンターは殆ど機能していない。これを会館と一体化し、更に二次救急病院とのより密接な連携を目指す必要があると考えます。加えて地域の健康教育や予防医学などの中心的施設とならなければならぬと思われます。また一寸したイベントの可能なスペース、健康教育や健康相談などに使えるスペース、会員のくつろぎのための和室等々、夢は果てしなく広がります。

立地条件、資金面などは別途考えることとして、この夢を実現させるためには一にも二にも会員のやる気だと思います。広域圏のセンターとして考えるのであれば、西砺波郡医師会との密接な交流はいうまでもなく、一方、行政との折衝、地域住民のニーズの調査なども欠かせないでしょう。

本年より会館建設委員会が発足しましたが、地域医療のセンターとして名実ともに悔いを残さないような計画の立案とこれの具体化を祈念し、100号記念の本誌上をお借りして提案する次第です。



腹立つこと

福野町
宮崎 修

今度の税制改革で一番許されないのは、一般消費物質に網羅的に税を掛け、値上りを誘発しておること、贅沢品に対しては税を軽くした事であろう。日本の税制が直・間接税の比率が諸外国に比べて、アンバランスであり過ぎると云われる。それが政府積年の願望である売上税と大同小異の、消費税制実施の強行となったものと思われる。税金は何らかの形で国民が払って行かなければ、国家は破綻する事は必定の理である。税の事にあまり精通していない私でも今度の消費税に納得できないのは、まず①免税点制度で、免税業者が消費税分を販売価格に上乗せしたら、仕入価格と売値価格時の消費税差分だけ、業者が儲けふところに入ってしまったのではないか。②簡易課税制度である、年間総売上額5億円以下の業者は、売上高の一定割合を仕入高と見てく一般業者は80%、卸売業者は90%の(はず)納税額を簡単に計算できるという制度で、仕入が実際には80%以下の業種と思われる弁護士、コンサルタント等のサービス業や通信、運輸業者などは税金の一部をポケットに入ることになり、①以上に悪制度だ。更に③免税点を超えていても6千万円以内の業者は納税額を軽減されるという限界控除制度や④課税業者が免税業者から仕入れた物を売る場合、消費者が負担し支払った消費税分は全額国庫へ納入されるのだろうか。合法的にうまくネコババされてしまったのではなかろうか、疑問と不安は拡大する許りだ。消費税に名を借りた便乗値上げが厭応なく起るであろう。

消費税の本体が理解できない中での発車で、減税しますとの政府の公言とは裏腹に一般庶民の生活は、困窮へと追いやられるのではなかろうか。かつてのロッキード事件など物の数でもないようなリクルート事件は三百数十億円にも達する大汚職の中で、自民党の鉄面皮政治家達の政治感覚には全く嘔飯、忿怒を感ずる昨今です。受けて立つ社会党を中心とした野党も全くグーシがない。馬鹿の一つ覚えという言葉通り、リクルート一本槍、日本の将来をどの政党に托したら良いのだろうか。社会党は過去40年不変の非現実的な政策を掲げ、

改革もしない、今や教條主義から目覺め、国民のための政党に脱皮し、自民党に対抗できるよう、政策転換を図らねば国民は到底応援し、追随することはできない。老人医療費の急増で財源はパンク寸前の状態という。この元兇は誰か、老人医療を食いものにした医師の金儲け主義と、マスコミは盛んに喧伝するが、このように医療大系を歪めていった真犯人。それこそ頑迷で傲慢な厚生省であり、一連の政治家だ。又日本医師会も頼りない。もっと智慧を結集して政府にぶつからねばなるまい。政治、選挙対策等資金集めをやったり、諸事業を企画しその御苦労は分るけれど、徒らに医師の出費のみを重ねているのではないか、その結果今日どれ程医師は豊かで幸せになっておるだろうか。いつまでも枚葉末節の問題にのみ、とらわれておるようでは医師は日蔭の職業となってさうだろう。後進に希望と栄光の道を開くべき責務は私どもにある。おわりに一言、国・公・私立医系の合格者を、各大学が減らすよう、一日も早く実現する事を願って、与えられた紙面をトジたいと思います。（平成元年4月10日稿）



春風に乗って

患者さんがやって来る

井波厚生病院
整形外科 村本 潔

今年は、例年になく桜の花の、優美な舞いを見る事ができたように思う。

咲き誇る姿や色合いは、一雨一風で台無しになることが多いが、承知のとおり暖冬で、降雪量も少なく、草木の芽生えも早目に訪れ、その上春先の冷たい雨や、この地特有の山からおろす南風（井波風）も、強風とまではいかなかった。このごろの天気と桜は私にとって、随分心地良い精神状態をあたえてくれた。と、冒頭から余談になってしまったが、井波に赴任して5年になる。家族が住まいする、金沢とここを行ったり来たりの生活だが、こじんまりしてのどかなこのまちに、愛着を感じている。行く末のんびりここで……なぞと考えたりもして。

さて、ここ1・2年、春になると外来の診察中、妙なことに気付いた。

わずかではあるが確実に外来へ訪れる患者さんのなかに、農家の高齢者がいることである。ほとんど腰痛・膝痛の人たちばかりだが、聞いてみれば、田んぼに入るからだという。私のような者からすれば、こんなに機械化されているのに、なんでまたと思い、同じ質問を何人かにしてみた。返って来た返事はどれも同じで、近傍農家の現状を物語っていた。

機械は確かに便利で、毎年良くはなって来ているけれど、隅から隅までやってくれる訳ではない。ちょっとした処は、やっぱり人の手が必要だ。だからその処は老人の仕事になってくる。とはいっても、最初の頃は、本人のためを思って、田んぼにはいってはいけない、してはいけない、と言っていたのだが、そのうち次第に、また痛くなったら治療して上げようと言う気持ちになって来た。

彼等、年寄りには年寄りで家庭内の役割分担を確実にもっていて、田んぼをする（自分の仕事）と云う事を、自覚している。それにもう一つ、とにかく体を動かしていないと気がすまないと言うこの地特有の気風があり、それによって生ずる腰や膝の痛みを当然のように納得している所がある。

中には、これから田んぼに入るので、あらかじめ予防のため、注射を打ってほしい、と言う人もいる。ちょっと、他の科では考えられない事ではないだろうか。

冬の間は体も休んでいる。それが桜が開花する頃、トレーニングなしで、急に体をうごかす。平坦な所ではない、あぜや土の中では、当然過度の力が膝に来て痛み出す。我々が、心地好く感じる春風が吹く頃、必ずやって来るこのような患者さんたちを診療しながら、否応なしにも「地域医療」の在り方について、考えさせられてしまう。

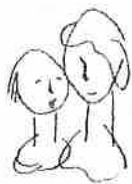
私なりに、砺波野に息づく人々の人間性と事情をふまえた上で、わずかながらあふけれど家庭内に入り込んだ考え方で、患者さん一人一人と接していけたらなあ、とおもっている。



昭和のおもいで 森田 嘉樹

私は'41年生れです。裕福な家庭だと親からも、周囲からも言われ、自分もそう信じて育ちました。幼稚園で進駐軍からの配給だといって、角砂糖を一個もらい、その白さと、砂糖がサイコロのようにになっている不思議さと、その甘さに非常に感激したのを今でもしっかりと覚えています。角砂糖がアメリカの豊かさの象徴の様に見えました。小・中学生時代、僕の弁当が時々同級生に取られました。取って食べた友人が、あんなに美味しい卵焼を食べたことがなかったといっていました。その友人の弁当はいもだけで恥ずかしくて人前でひ

ろげられなかったのだそうです。また、今でいう子供部屋らしきスペースを造ってもらいました。自分ながら勉強しやすい環境だと思っていましたが、外とは障子一枚の隔たりでした。冬、障子の破れたところから雪が吹き込み、布団の上にうっすらと雪が積もることがありました。室内で吐く息が白くなるのを見て外の寒さを直接感じていました。着ぶくれの上に毛布をかぶって机に向かっていました。それでも自分は着ぶくれになれるほど上等な環境にいると思っていました。冬、半ズボンでいる子供を見たら貧しい家の子供だという印象がいまだに残っています。満州から引き揚げてきた同級生のお母さんから、冬、裸に近い姿でいながら「内地は天国じゃ、凍えることもなければ、敵も攻めてこない。食うものもある」と言う話を聞かされ、子供心ながら何でまたそんなひどいところへ行ったのかという疑問を感じました。日本の貧しさが人々を満州へ行かせたのだ、と最近理解できるようになりました。私の家に北海道から売られてきた（に等しい）、私よりも数年年上の女性が何人かいました。「家に帰りたくないか？」と聞いたら「寒さと、ひもじさと、親の酒を飲む姿を見ているのに比べたら、姉とここにいろぼうがよっぽど楽だ」と言っていました。戦後の混乱期だからこんな状態だったのかと思っていましたが、母に聞くと戦前だって似たりよったりのものだと言っていました。自分がPTAなどに関係するようになってふっとこんな話を思い出し、昔の父親は自分の娘を売りに出してそれを酒代に出来るほど権威があったのだと感心できるようになりました。いわゆる第二次世界大戦の話が、昭和天皇の足跡とともに色々かたられていました。軍の横暴が戦争の主な原因であったという話がほとんどでした。そんな話を聞きながら私は、かなりの人が満州へいかざるを得なかったと言うような日本の貧しさが戦争の原因の下にあるように思われてなりません。豊かになった今、戦争が二度とおこらないように、と言うのは簡単です。昔の貧しさのなかで、戦争がおこらないようにと言えたかどうか今の私には自信がありません。



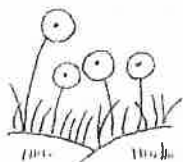
病院だより

井波厚生病院外科
八尾直志

井波厚生病院内報として発足し、院内職員の相互理解と親睦を目的として発刊した“病院だより”ではあったが、地区住民の希望もあり、第2号から地区

の各家庭に配布する様になった。年4回、3ヶ月毎の発行で、今回第10号を数える事になったが、第4号より、編集の仕事に携わる様になり、高校時代より国語は“赤点”が常習であった小生にとっては頭が痛く、全く暗中模索のスタートでありました。幸い多方面の方々からの助言やご協力、他の編集委員の献身的な活動のおかげで今日まで何とか続ける事ができております。他施設の先輩方から見れば笑止の事もかもしれませんが3ヶ月に1回、たった8頁から10頁分の原稿を集めるのに苦労しているのが現状であります。昨年よりは何かしら各号に特色を持たせたいと愚考の末“MRI特集”や“データ管理特集”等の特集を組んでいますが、これとてすぐに種切れとなり次号の案がなかなか思い浮かばないといった現状です。対象が地区住民ということで、できるだけ平易な文章で書きたいと考えていますが、データ管理等、我々にとっても難解な事柄を簡単に書く事の矛盾と困難さも十分に味わっています。毎日読んでいる新聞がたった1日でよくも大量の内容を消化できるものだと思いに感動したりしています。

今後もこの苦労は続くと思いますが、でき得れば諸先生方の御助言と御協力をお願いしたいと考えております。



「杏和だより」

100号発刊によせて

矢ヶ崎 淳 一

本年は「杏和だより」100号発刊の由真におめでとうございます。

私も10年ほど前ですが少しの間でしたけれどお手伝いさせていただいた事がありますので委員の方々の御苦勞身に沁みてわかります。本当に御苦勞様でした。

私事ですが本年は私にとりまして人生のけじめを迎えました。やりたい事、行ってみたい所、いろいろありますがどうなりますことやら、特に少年時代しばらく過した四国へ行ってみたいと思っています。当時本土から四国迄連絡船で2時間もかかったのが数十分で行けるとは夢みtainな話。然し何をするにも何と言っても健康であります。私は身をもって体験したあの苦しみ、あの苛立ち初に忘れず適当な運動、適当な休養又適当な食事、言うのはた易いですが実行は中々むずかしい。

頑張らしましょう。「杏和だより」のご発展を祈ります。



私の歳時記

矢島 治

去年の夏は異常気象と言われるものであった。それ故にかどうかは知らないが、気象庁の長期予報でも、冬は大雪と言っていたし、回りの人もそう思っていたらしい。そんな中で私一人、暖冬であると家の者に言いきっていた。普段は親父の言う事などフーンといい加減に聞いている次男も、私の予報がドンピシャ的中して、流石に感心していた。

暖冬故に今年の桜は開花が早かった。4月初旬所用にて金沢に行つて来たが、兼六園の桜が綺麗に咲いていた。満開の桜並木は非常に艶やかであり、いわば春の一時期にきらめくスターである。入学・進級・就職等を祝うにふさわしい花でもある。都会の排気ガスで汚れた大気の中でも、逞しく咲いている。

桜の開花に伴い新年度もスタートした。消費税という新しい何か訳のわからない制度も導入された。それにしても最近、次から次へと新しい事が出てきて、齢（或は弱医であろうか）還暦を過ぎた私には、なかなか付いていけそうもない。特に医学用語ばかり、マスコミに登場する新経済用語などもしっかりで、略語にはからきし弱い。英語の略語なぞ？なものもかなり多い。私のような（私だけかも知れないが）昭和30年代卒では、なかなか英語には馴染めない。最近はこのような風潮なだけに一層困ったものである。如何とも仕難い。やはり齢（弱医）のせいなのか。今春も私の知人や後輩の何人かがリタイアした。彼等の心境は、ホッとしたというよりも、一種の寂しさの方が強いようである。なる程開業医には定年は勿論ない。そういった意味では恵まれているかも知れない。生涯教育と言われているが、どこまで勉強していけるやら自信もない。このままマイペースで行くのみである。日経新聞のコラム“春秋”に記載されていた“よるとしや 桜のさくも小うるさき”という一茶の句の心境にはまだまだなりたいくないものである。





町医者のたわごと

城端町
山 秋 義 人

先日20年ぶりに会う旧友も含めた10年ぶりのクラス会（一寸ややこしいのですが）があり、再会の美酒に酔いしれた1日を過ごして来ました。同級生には、大学の助教授あり、市中病院の部長あり、基礎研究者あり、保健所課長あり、私も含めた開業医あり、医療分野の総花的な会話をしてきました。深酒の力をかりてホンネを聞きだす無礼もしてきました。

皆適度に年若いながらも、表面的には背のびしたウンマソイ自分の研究分野の自慢話ではありましたが、技術的に一人歩きしてしまっている医学への疑問や、偏差値で選ばれた後輩への不満とか、白髪も一寸めだちはじめた旧友の共通の悩みであったようです。その点では10年前の雰囲気、すなわち「こわいものしらず」の自慢話とは一寸趣きが違っていました。皆夫々の分野で苦勞しているんだなあと感慨を新たにして帰りの車中二日酔いの頭を車窓にくっつけながら帰ってきました。さて、日進月歩の医学の発展の中で、直面している課題はと考えると、ハイテクノロジーの医学への応用という最先端の一面と、人間性の回復といった倫理上の見直しが、今医療社会のバランス感覚として問われている時代の様です。例えば、観血的検査優先から非観血的検査へと、又は物理的・生化学的検査に伴う生体のモニター化からくるスパゲッティ症候群（あらゆる管や線を身体にくっつけてスパゲッティの様に器械につなげられた生体管理システム）の治療への是非論、病院死から自宅死への回帰、脳死臓器移植か人工臓器かはたまた尊厳死か、等々、これからもずっと我々医師には問われつづける問題でありましょう。開業医の私の立場からすればこの様な問題に直面させられる機会は直接的には無いにしろ、専門病院へ患者の紹介状を書く時に、いつも私の脳の前端には、これからお世話になる病院でこの患者はどの様な事をされるのだろうかなあ、患者以上の不安を持つこともしばしばです。そしていつの世でも人間性の回復を常に問い直し軌道修正のはかれる医学医療であってほしいものと願いつつ今後の病院システム、行政システムに期待もし、又自分自身も日常診療で職員と共に反省しながら、軌道修正する柔軟さを養わねばと反省している今日此頃です。



自分の死

吉田 武雄

高令化が叫ばれて久しい。ようやく地域に於ても高令化が現実化して、老人保健証の患者が増加の傾向に為って来た。此の事に対応する為に地域では行政を中心として、色々の対策を考え、実行され出した。併し、人間は生物である以上、如何に高令化するとも、いずれは死ななければならない。既に、死を迎える終末医療を、どの様な型で対応するかと云う事だ。此の様な事を医師の立場で色々と論議すると、当然、自分自身の死の問題が浮かび上って来る。常時、職業として、死に直面していながら、自分の死に対しては、何の心の準備も出来ていない事に驚くとは誠になさない。今後、終末医療を考える場合には、是非、自分自身が、どのような医療を受けたいかと考えて論ずる事が必要の様に思われる。とともに自分自身の死を心の中で確立して、自分の為に価値のある余生を過したいものだ。



私と昭和

吉田 頼子

私事になりますが

昭和15年

見よ東海の空明けて 旭日高く輝けば 天地の精気はつらつと 希望は躍
る ^{おきゃは} 大八洲

と、歌いながら、桜田門外から、宮城のお堀のふちを通過して、靖国神社へと向って 日の丸をふりながら 賑々しく 二千六百年のお祝いをしたことがつい此の間の様に 脳裏をよぎります。が、その翌年の十二月、第二次世界大戦に突入する前奏行進行事だったのでしょうか。

それまで 小学校の頃から 駅へ出征なさる兵隊さんを見送ったり、陸軍病院へ傷ついた兵隊さんを見舞ったりしていましたが、戦争は遠くの出来事と軽く思って 日本はゆるぎなき国と 青春は私にとっては校服に身をつつみ、何の不安も感じない 人生で一番幸せな時代だったようです。

平時でしたら短期間三ヶ月で現役を終えるはずの主人が、そのまま召集され、

軍医として 満州国当時関東軍軍人将校として出征しました。最初、国境の守備でしたが、途中から当時新京の鉄道司令部に派遣になったので、昭和十九年二月、内地は食料不足になり、屋敷の木も献木され始め、家の者の反対の中 満州へ旅立ったものでした。その時長男は五ヶ月で私のお腹の中で生命を育てている時でした。昭和二十年の敗戦と同時に、主人は軍隊と一緒に行方知れずになって、残された軍の家族の路頭に迷う日が始まりましたが、私はありがたいことに難民収容所で同窓の万にめぐり合って、不慣れを承知で診療の仕事につかせてもらって、親子ともども生き長らえることになりました。(でもそれもほんの一時で、八路軍に薬品を徴収されて続けることが出来なかったのですが)主人も極寒のシベリアから、私より一年おくれて帰国しましたが、思えば、文字通り、苦難の道をよくも ずうずうしく、主人はとっくに逝ってしまいましたが、歩いて歩いて 後まだ どれだけ続くのか、苦しくて面白い人生を十分に楽しまねばと聞きなおって居りますが、平成元年を迎えて、消費税でゆれ動いていますが、終戦の傷跡もまだ色濃く残して、次第に若い人の社会に変わりつつありますが、戦争のきびしさを知らない若者たちが、どのように日本を守って下さるのか、何時までも見守りたい心境の此の頃です。

＜ 告知 板 ＞

社団法人砺波医師会定例総会議事録

日時 平成元年3月26日(日) 午後5時～6時

場所 砺波市中村/96番地 ふかまつ

会員総数 120名

出席会員数 23名

委任状提出者数 63名

経 過

定刻に水木議長の開会宣言があり、出席者数23名、委任状提出者数63名により、総会成立の報告があった。

ついで議事録署名人に福井梧、広野隆の両会員が指名され、会長の挨拶の後、

伏木副会長より、ろ3年度庶務並びに事業報告があり、柴田会長より、砺波准看護学院のろ2年度収支決算報告があった。

ついで議事に入り次の議案が審議された。

議 事

第1号議案 砺波医師会昭和ろ3年度収支決算の件

伏木副会長の説明の後、永木監事から監査報告があり原案通り可決された。

砺波医師会臨床検査センター昭和ろ3年度収支決算の件

津田理事の説明の後、永木監事から監事報告があり原案通り可決された。

第2号議案 平成元年度砺波医師会活動方針の件

柴田会長より説明の後、原案通り可決された。

第3号議案 砺波医師会平成元年度収支予算の件

伏木副会長の説明の後、原案通り可決された。

砺波医師会臨床検査センター平成元年度収支予算の件

津田理事の説明と柴田会長の補足説明の後、原案通り可決された。

第4号議案 平成元年度砺波医師会会費賦課徴集規程の件

伏木副会長より、前年度と変わらないとの説明の後、原案通り可決された。

第5号議案 会館・准看護学院建設特別会計の件

柴田会長より説明があり、仲村会員より、会員の負担を出来るだけ軽くする様、補助金等を得るようにして欲しいと発言あり、会長もその様に努力すると返答し、原案通り可決された。

終わりに柴田会長からおれの挨拶と、永木議長から会議の進行についての協力に感謝するとの謝辞があり、拍手の内に閉会した。

定例理事会

(平成元年4月10日)

出席者 柴田、伏木、金子、伊藤、平川、鷹面、荒川、中田、森田、金木、
津田、永木、仲村、藤井、

報告事項

1. 学術講演会報告 荒川理事
別掲の通り
2. 准看護学院卒業式(3月8日) 柴田会長
看護学院だより参照。試験は全員合格した。
3. 県・郡市医師会協議会(3月10日) 柴田会長
県医報4月1日号参照
4. 県医検査センター連絡協議会(3月13日) 柴田会長
県医報4月1日号参照
5. 県医地域保健委員会報告(3月15日) 中田理事
県医報4月1日号参照
6. 県医健保・医療経済委員会(3月25日) 金子副会長、平川理事
県医報4月15日号参照
7. 定例総会(3月26日) 伏木副会長
別掲の総会議事録参照
8. 県医定例代議員会(3月27日) 柴田会長
県医報4月15日号参照
9. 福野保健所老人保健連絡会議(3月27日) 柴田会長
管内各市町村の昭和63年度の事業報告がなされた。
10. その他
3月7日県医スポーツ医学委員会があり、亀井先生が出席した。県医報3月15日号参照

協議事項

1. 各市町村の健康診査について
今年度の事業計画が決まり次第、報告して戴き、それに従って地域保健委員会を聞くこととした。
2. 生涯教育報告書の提出について
4月15日までに提出するよう努力することとした。
3. 会館・准看護学院建設特別会計の基金について
一般会計より700万円を繰り入れることとした。

- 4、在宅当番医委託金の配分について
5月の理事会で決定することとした。
- 5、各委員会の開催について
各担当理事に一任することとした。

学術生涯教育委員会よりの報告

4月10日理事会

〔学術講演〕

3月7日(火) 『胃がんの診断・治療における最近の話題』

金沢大学がん研病院教授 磨伊 正義 先生

司会 寺中 正昭 先生

3月28日(火) 『癌の臨床検査』

浜松医科大学検査部教授 菅野 剛史 先生

司会 小林 長 先生

〔学術講演の予定〕

4月11日(火) 『最近の耳鼻科の話題』

富山市榎耳鼻科院長 榎 陽一郎 先生

司会 河合 康守 先生

4月25日(火) 『肝画像診断の最近の進歩』

金沢大学放射線科助教授 松井 修 先生

5月23日(火) (仮) 『高脂血症について』

金沢大学第二内科助教授 馬淵 宏 先生

後援 第一製薬

6月27日(火) (仮) 『腎移植をめぐって』

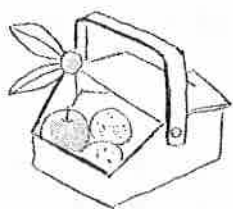
金沢医科大学泌尿器科教授 津川 龍三 先生

(交渉中)

7月25日(火) 『柴胡剤の使い方』

富山医科薬科大学和漢診療部助教授

寺沢 捷年 先生



学院だより

第25回生入学式

平成元年4月13日(木) PM 2:~3:

砺波市立総合病院講堂

新入生20名(男子4名含む)

司会 西野章悦副学院長

1. 開式の辞

1. 君が代斉唱

1. 新入生氏名点呼

1. 学院長式辞

1. 来賓祝辞

桐沢奨二学院長

富山県厚生部長代理、楳野保健所長

中川昭忠先生

富山県医師会会長代理 藤井正成先生

砺波市立総合病院院長代理 永森文夫先生

1. 祝電披露

小矢部市長 大家啓一、県会議員 沼田仁義

砺波市長 岡部昇栄

1. 在校生祝辞

吉田 誠

1. 新入生誓いの言葉

長田朗子

1. 花束贈呈

在校生代表 酒井仁美。新入生代表 森田晃子

1. 閉式の辞

新入生父兄への要望 西野副学院長



25 回生名簿

講師のご紹介 (1学期)

1	浅井香奈子	矢ヶ崎医院
2	上野尚宏	沼田病院
3	大庭久幸	大家病院
4	大野和美	松岡病院
5	片山由紀子	〃
6	河合恵美	太田病院
7	清原信治	松岡病院
8	久保博之	矢後病院
9	佐伯三雅	沼田病院
10	新堂純子	松岡病院
11	高城香	高橋医院
12	滝本美香	野村病院
13	中嶋力オリ	福井病院
14	平世都子	沼田病院
15	長田明子	沢田医院
16	西尾直美	高橋医院
17	廣正美	石川産婦人科
18	森田晃子	柴田内科
19	山本正	城端厚生
20	山純子	大家病院

1年生

解剖生理	小林長
	北野喜行
	高橋卓朗
	柴田道也
	永木正雄
病原微生物	河原信子
公衆衛生	野原友次
看護倫理	川崎房野
国語	浅田睦子
看護史	川崎浅田
個人衛生	
看護の基礎	

2年生

放射線科学	角田清志
理学療法	田川春朗
精神科看護	作田克喜
内科看護	田嶋恵美子
外科看護	藤井敬子
国語	野原友次
生花	橋爪孝仙

3月15日富山県准看護婦資格試験発表あり、当学院卒業生18名全員合格しました。先生方、ご協力ありがとうございました。



地区だより・病院だより

◇◇ 砺波地区 ◇◇

- 3月22日 母子保健連絡会（市役所）
（保健所長、保健婦、助産婦 20名）
津田 達雄

◇◇ 福光地区 ◇◇

- 4月11日（火） 定例会（於あそぶや） 出席者 10名

◇◇ 庄川地区 ◇◇

- 3月30日 役場と平成元年度保健・健診打合せ会
（越中庄川荘に於て）

◇◇ 福野地区 ◇◇

- 4月21日（第3金曜日） 定例集会、於町保健センター
5月8日～31日、6月5日～3日に行われる老健法に基づく健康
診査に関する打ち合わせが行われた。精密検査の項目として、昨年度
より γ -GTP が、今年度よりはHbA_{1c}を追加することになった。
（町保健衛生課より課長、保健婦出席。）

健康教育

- 4月6日 糖尿病の日常の生活（福野糖友会） 金井正信
- 4月14日 脳卒中の再発を防ぐ（リハビリ友の会） 伊東方美
- 4月19日 骨と老化とその予防（食生活改善推進部会） 北野善行

◇◇ 城端地区 ◇◇

- 4月11日(火) 地区医師団懇親会を、観桜会を兼ねて開催。

於、楳光 松風園

参加者は、山秋、松田、伊藤、勝川(北陸病院)並びに城端厚生病院より8名。合計12名。

盛会で、交流を深めた。

席上で、町の住民検診に糞便潜血検査を加えたい。ということになり、厚生病院で検査の実施を担当すること。町の予算が取れなければ、医師団で経費を負担してでも実行いたしましょう、ということになりました。

◇◇ 砺波総合病院 ◇◇

- 4月1日 新任職員(名)就業
- 4月9日 第4回虹苑杯ゴルフ・コンペ(市職員ゴルフ)
千羽平GC 参加 24名
優勝 三崎 先生(病院泌尿科)
- 4月15日 第5回小杉杯ゴルフ・コンペ(院内外科ゴルフ)
高岡GC 参加 16名
優勝 山下 先生(外科)

◇◇ 城端厚生病院 ◇◇

- 3月22日 平成元年度城端町、平、上平、利賀村検診計画打合せ会
- 3月23日 城端町厚生病院医局送別会 城端町 湖畔荘 28名
- 3月23日 講演会
「肝臓を守るために」 保健センター 50名
根井 仁一先生
- 3月24日 昭和63年度剖検者追悼法要 城端別院 40名
- 3月29日 日本外科学会 東京
「閉塞性黄疸の脳組織変化について」 古川 幸夫先生

- 4月 / 日 平成元年度辞令交付式
城端厚生病院会議室 55名
- 4月 4 日 医局歓迎会 城端町 かねしま 10名
- 4月 / / 日 城端医師会花見会 稲光町 松風園 15名
- 4月 / 4 日 城端厚生病院花見会 稲光町 宮川 80名

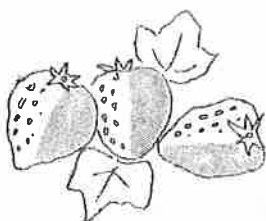
◇◇ 国立療養所北陸病院 ◇◇

講演者 勝川和彦（副院長）
演 題 老人の精神学について
日 時 平成元年3月28日
会 場 やすらぎ荘
参加人員 30名

医師の異動について

山形章夫（内科医師） 3/31 付退職
沖野惣一（ ） 4/1 山中病院より転任





編集後記

昭和45年9月に誕生した杏和だよりが今回で100号になりました。この編集にたずさわったものとしては、我が子の成人式を祝ってやるような気持ちです。沢山の会員の皆様からの原稿は、暖かい祝辞のようで、感謝しております。文章を書くという仕事は、聞く、読む、ということとはくらべものにならないほど精神的なエネルギーを使います。そういう精神的な訓練の場を杏和だよりは私達に提供してくれたと私は思っています。また、ガリバン刷りという気安さがその苦痛をずいぶん和らげてくれました。

私達の回りには沢山の印刷物があります。読みやすい活字や写真が満載された本が、パラパラとめくるだけで私達の前を通りすぎて行きます。杏和だよりが生れた頃、ガリバン刷りの印刷物はごく一般的なものだったと思います。しかし今では、町内会の案内でもワープロで打たれてくる時代になりました。編集委員会でも何回か読みにくい謄写版印刷はやめて活字印刷にしようという話が出ました。この方が経済的だからという意見もありました。しかし、読みにくいから、時代遅れだからといって今までのガリバン刷りを簡単に捨てていいものでしょうか。私は謄写版印刷とその字体は日本の一つの文化だと思っています。印刷物は人に読んでもらうためのものです。読みやすさの面では確かに活字が勝るでしょう。しかし、文字から受ける暖かさ、手作りの暖かさ、という魅力はガリバン刷りでなければ出せないものだと思います。印刷物が人に読んでもらうために、そういう魅力も大切なものだということを杏和だよりが教えてくれるように思います。私は吉田さんが原紙を切ってくださいるかぎりこの謄写版印刷を続けていただきたいと思います。

次号も今までのようなスタイルで発行していきたいと思っています。101号の散居村の欄の順番は能海先生、平川先生、広野先生、福井先生、伏木先生になっております。ご無理は申しませんがよろしくお願いいたします。また、中田先生には北極圏の旅行記をお願いいたしました。（森田 記）

編集委員

荒川、津田、仲村、根井、野村、藤永、八尾、森田